

婦人止學毛



第二卷
第八號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行

定價 一册金拾錢○六册前金五拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵稅各一册一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。

入會者 は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フ
レーベル會あて申し込まれるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

讀者 是總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取
掛所受取入金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限り十二枚封入にて申し越されたこと○前金は切手二錢に限り十二枚封入の上にて申し越されたこと○御断り下されたく候は新舊共に御通知を乞ふ

編輯 編輯に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレイベル會あてのこと
廣告料 一頁十圓半頁五圓

明治三十五年八月二日印刷
同 年八月五日發行

不許複製

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發售所 東京市日本橋區本石町三丁目三十三番地
東京東京堂 ● 同東海信文合資會社 ● 同北隆館

懸賞文募集!

文題 幼時の家庭

顧みて想ふ。父母在し祖父母在し、兄弟姉妹打ち揃うて融々春の如き家庭團樂の中に育ち來りし吾。翻つて見る。搖籃の中早く母を失ひ父に別れ、天地の間頼るべき兄弟なく親しむべき姉妹なく、辛酸備さに嘗め來りし彼。同じく人と生れて今日に至れる間、幸と不幸と相去る何ぞ夫れ然く甚しき哉。思ふに我敬愛せる讀者諸君諸嬢の中、或は前者の如くにして來り今尙其樂を享けられつゝ在はすもあらん。或は不幸後者の如くにして獨立獨行遂に大成の途に近づきし人を知られん。乞ふ、既往幼時の家庭を追懷して、其最も深き印象を今日に残せる當時の有様を、自己の經驗より或は他人の經驗の觀察より取りて投せられよ。境遇を同じうする人の樂を増し苦を分つのみならず、抑々又讀む人の家庭教育上、參考たること頗大なるものあらん。

賞品

- 一 等
- 二 等
- 三 等

紐結包物標本及解説教授法 石井泰次郎先生著 (同先生寄贈)
美麗なる標本數十種に優美なる解説教授法を添ふ
言文一致 言文一致研究會編纂

本誌三ヶ月分

文體は隨意。談話体にて普通文體にても古文體にても宜し。氏名は匿名にてもよし
文字は正確。楷書にて半枚十行二十二字詰のこと。

切期限は、八月三十一日限り。

發送は封紙、に婦人と子とも懸賞文原稿と記し、東京本郷區龍岡町三十四番地東基吉宛のと。

追つて八月中に限り、原稿はすべて右記の處へ御送附の程願上候。

フレイベル會規則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ケ
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ贈出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
 - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
 - 一 會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
 - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
 - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一人 會務ヲ總理ス
 - 幹事 十人 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス
 - 評議員 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス
- 但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルトコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更スルコトヲ得ス

會員募集!!!

本誌號を重ぬるに従ひ、漸次体裁内容を擴張せんとす。諸君諸姉、乞ふ本會の趣旨を贊助せられ、此際奮つて御入會あらんことを。

- 一、會員の知己を有せらるゝ方は、右會員の紹介によりて本會に申し込まるべし。
- 一、會員の知己なき方は、會費前納と共に直接本會に申し込まるべし。
- 一、會員はなるべく入會者を御紹介あらんことを望む。

明治卅五年七月五日

東京本郷區湯島女子高等師範學校附屬幼稚園内

フレイベル會

婦人と子ども第二卷第八號目次

子ども

黒作と狼(やまとの翁)小蝶物語(野口雨情)傲慢な男(小島松之助)樅の木とすゝき。笑ひ草。懸賞問答當撰披露。同次の問答。海水浴に行つて溺れぬ法。水の誠。

家庭

子供に聞かせる話につきて(二)……東 基 吉
 大事を取り過ぐるこゝと……林 ふ み 子
 學校病……醫學士 長瀬復三郎
 昔いろは料理……石井泰次郎

學術

蜜蜂の話……在農科大學 鷲 水
 眼の話……在福井 本 郷 生
 鐵道の話……菊 亭

史傳

國學と荷田春滿(承前)……米 溪

文苑

歸省……佐々木信綱外
 梅雨晴……横山 碩外
 くちなしの花……東 く め 子
 はたる……つ ね を
 一朝の樂しみ……楓

說林

本邦古代保育法の一斑……下村三四吉

寄書

お寺參りの婦人と子ども……岩手 凹 凸 子
 母と子と繼母……東京 林 壽 祐

雜錄

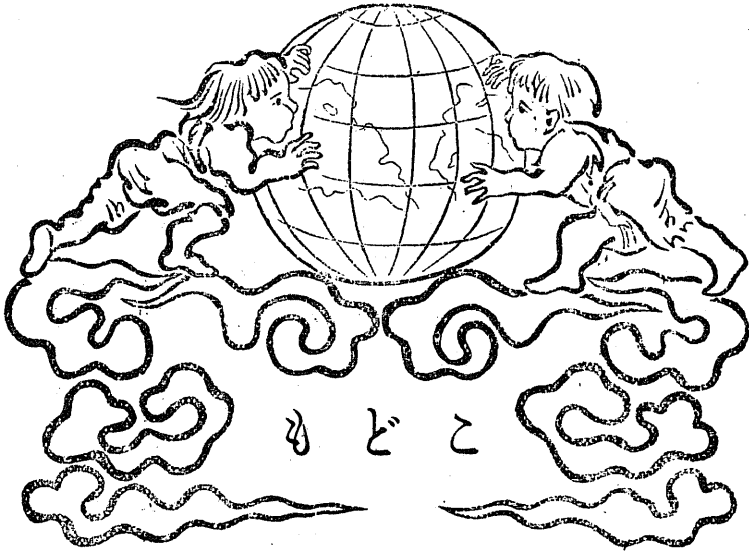
夏の家庭……や、
 水と人生……川口孫次郎
 幼兒の支那人に對する考……ひ さ 子

彙報

九重の御消息●學びの窓●東京たより(擊水生)●
 長野通信(飯島八千溪)●北海道通信(通信生)●海
 外彙報(故瀨川友子)●新刊紹介●會報

も どり と 人 婦

號 八 第 卷 貳 第



黒作と狼

やまとの翁

黒作わ 永年田舎の百姓に
 飼われた忠義な犬でありま
 したが、だんく年をとる
 につれて、齒もぬけてしま
 い、力もなくなり、はやく
 走ることにも出来なくなつて
 もーとても、もとの様に役
 にたゝなくなりましたから
 家の主人が、ある日お女房

さんに申しますにわ、

『黒作も　もーあの様に年を取って、役に立たないから　明日わ思い切って　打ち殺してしまをーじやないか』

けどもお女房さんわ、さすがに可愛相だと思ひまして、

『夫でもあなた、あんなに永い間、忠義をしたんですもの、もー役に立たないからって、殺して仕舞うのわ、可愛相ですわ、

私しや　彼が病氣で死ぬまで食べさせてやりたいと思ひます』

すると主人わ、

『オや、お前何をゆーの、黒作わもー齒が一本もないのだよ、盗賊だつて彼を怖がりわしないよ、永年忠義をしたに違わなけれど、其代り毎日食べさせてやつたじやないか。』

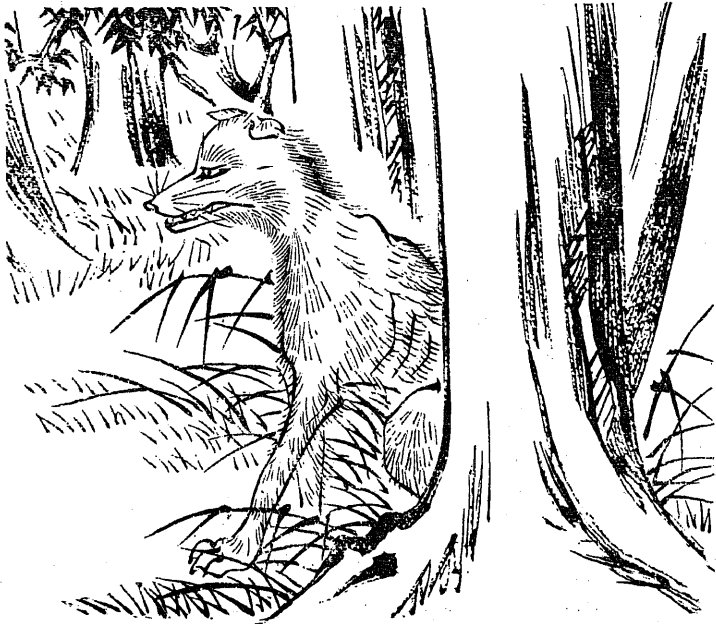
憐あはれな黒くろ作さくわ 先まき程せきから門かど口ぐちの日ひ當あたりのよよい所ところで心こころもちよく
 仰あや向むに寝ねて四し足そくを伸のばして休やすんで居ゐたのですが、不は圖ち主しゆ人じん夫か婦か
 の話はなを殘のこらず聞きいたもんですから、さー明あ日すになると 自じ分ぶんの
 生い命めいがなくなるとゆーので、心しん配ぱいでくくたまらなくなりました。
 所ところがこの黒くろ作さくに一ひとり人りの友とも達だちがあります。それわ森もりの中なかに住すん
 だる狼おおかみなのです。黒くろ作さくわ 一ひとり人りで考かんえてもくく助たすかるよい工く夫ふ
 がでないもんですから、其その晚ばんになって、そっと狼おおかみの所ところえ行いって
 明あ日す殺ころされるのだとゆー 悲かなしい話はなをして どーか助たすかる智慧ちゑ
 があるまいかと 相き談だんをしました。しますと狼おおかみわ
 『あるともくくお父とうつあん 大だい丈じやう夫ふ金かねの脇わき差さ！ 私わがが付ついて居ゐ
 ますよ。其その工く夫ふとゆーのわ こーです。明あ日すの朝あさ お前まへさんの

御主人が　れ女房さんと　屹度畑え行くに違ない
『行くに違ない』

狼『すると　家には誰も居ない
から　あの赤ん坊も連れて行く』

『ウン連れてゆく』

狼『それから　畑で二人が仕事
する間　赤ん坊は木の蔭え寝
かして置いて、そらお父つあ
ん、お前さんを番人に付けて
置きましょー。』



『黒フン附けて置く、夫から…』

『狼』そこでです、そこえ私が森の

中から そーっと出て行って

其赤ん坊を盗んで駆け出す』

しますと 黒作わ眞黒くな

って 怒り出した。

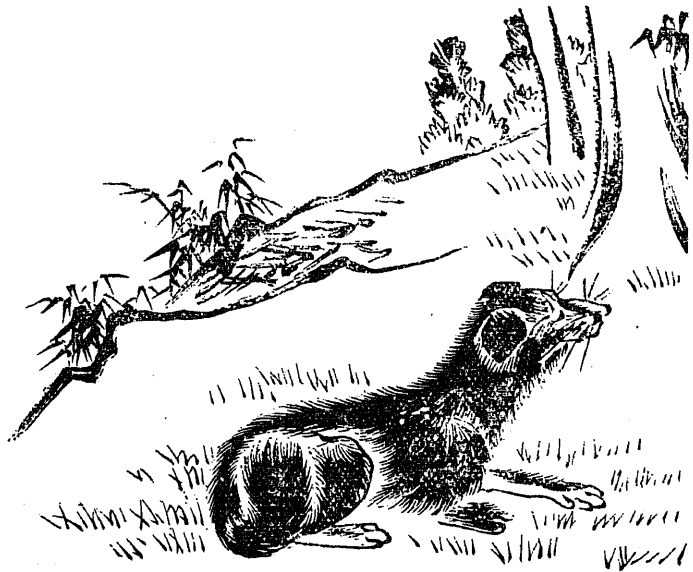
『黒』そりや承知しないよ、主人

の赤ん坊を盗むなんか、出来

るなら盗んで見よ すぐお前

の生命を貰うから』今にも飛

ひかゝり相に身構しますから



狼わ狼狼てゝ飛びのきながら

『あゝ、まったく、お父っあん、眞實に盗むんじやーない、それが計略なんですよ、よくきーてくれなきやー』

黒『フーン 計略なのか それなら早くそーいえばよいに、夫か
ら』

『私しが赤ん坊を盗むでしよー、そこでお前さんが夫を見附けて 一生懸命に私しを追っかける、私わ逃げる、とーく道へ赤ん坊を捨てる、お前さん夫を取り返して主人の所え持つて行くすると主人わお前さんの手柄に免じて、殺す所の騒じやない、今迄よりも余計に可愛がってくれる、どーです、甘い工夫でしよー』

黒『作わ一寸首を傾けて、考えて見て』

黒「いー工夫だが、なんだか主人を欺す様に當るなー」
狼「欺すったって、夫で悪い事をするんじゃないし、お前さんの生命を助ける爲め丈けだから、いーじゃないか」
そこで黒作も、なる程と感心をして とーくやってみる事にしました。

さて翌日になって狼が赤ん坊を嚙えて駆けて行くのを見た時に主人夫婦は吃驚仰天しましたが、黒作が一生懸命に追っかけてすぐ取り返して来たもんですから 夫から主人が大變に黒作を大事にして、柔かい肉だのお魚の身などを料理して食べさせるやら、寢所の藁を新らしいのと取り代えるやら、夫わく今迄と打って變って、大事に養いました。

或晩のこと、久し振りで、狼が黒作の所へお見舞いに來てこの具合のよいのを見て、まづお目出たいといって お祝をしまし

て、
 『時に、黒作お父っあん、其代り私がお前さんの御主人の所から 羊を一匹取って行こーと思ーが、お前さん 此間のお禮に目をつぶって 見ぬ振をして居て下さいな』

『そりや、不可ないよ、主人が折角私を信用して大事に養って呉れてるのだもの、そんなことが出来るものか』

けれども 狼わ黒作がじよーだんにいったんだと思つたもんですから、夜になつて そーつと牧場へ行つて羊を盗みに行きました。すると黒作わ すぐ大きな聲で吠え出しましたから、

番人が太い棒を持って出て来ていきなり狼をなぐりつけました。狼が吃驚敗亡、跛ひきながら『黒作お父、あんな覺えて居らっしゃい。今に敵を取るから』と叫びながら逃げて行きました。

さて翌日になると、狼の處から野猪が使に参りまして、黒作に出で来る様にとの事です。所が黒作の味方とゆーのは、一匹の猫より外にない、夫も一本の足を怪我して、三本足なのです。仕方がないから、黒作は三本足の猫と二人で行きます。可愛相に猫が足が痛いから、尾を高くピンと上にもち上げてピヨイピヨイと三本足で飛んで行きます。森の中に行つて見ますと、狼と野猪とわもー其場所に行つてちゃんと待つて居ま

す。けれども二人が遠方から黒作と猫とが遣つてくるのを見た時に、非常に吃驚しました。とゆゝのわ、猫の尾が眞直に立つてゐるのが、ちよゝど直前に長い劔を捧げて来る様に見えるし、三本足でピヨ―イ、ピヨ―イと跳ぶのが何でも自分等に抛げ附ける爲に、大きな石塊を幾つも拾つて居る様に見えたのです。そこでこの二人わ急に怖くなって、野猪わそこいらの藁の中に身体を埋めて仕舞う、狼わ木の上に昇つて仕舞いました。そこで黒作と猫と來て見ますと、この有様で誰も居ないので、から、不思議に思つて眺めて居ます。しますと、野猪わ、身体がみんな隠し切れないで、耳丈けが出て、ピンくと動いて居ました、猫わ夫を見付けて、これは鼠だなど思つたもんですか

ち不意に其耳へ食い附きました。野猪は堪らないでキャー
 と鳴いて飛び出して『木の上に悪者が居るのだよ』といーな
 がら逃げて仕舞いました。二人が木の上を見ると、狼先生木
 の枝につかまって居ましたが、大變に自分の弱かったことを耻
 かしがって犬の前に下りて来て謝ってとーくもとの通り仲
 直りをしましたとさ。めでたしく



小蝶物語

野口雨情

●守り神様の巻

小蝶子之助が京ちやんと袂別をして、守り神様の御社へ歸つて参りました。

すると、子之助の親類の者や、友達共は何れも一の鳥居の前へ踞んで何にやら相談をして居るやうな様子でしたが、子之助の姿を見るより。

『やア、子之助さんちや無いか。』

『やア、子之助さんだ。』と心配から蘇生つた如な嬉しい顔をして一同が驅け寄つて参りました。

『皆さんに久し振りで御座いました。』と子之助が丁寧に辭儀を致しますと。

『私共は昨日歸つたのだが、子之助さんが歸ら

ないので、神様にお目通りが出来ないから、致方なしに昨夜は此處で夜を明したのです。』と一番大きな蝶が申しますと、その次ぎのが。

『いよ、子之助さんが、今日も歸つて来なかつたら、皆が手を分けて探しに出やうと相談を仕て居たのでした。』と言いますと残の一同も口を揃へて。

『何にしろ、達者で歸つて来たから宜かつた。』と喜ばしさうにつぶやきました。

子之助は鳥居の傍へ座りして、一同に心配かけたのを頻と謝りながら。

『私共早く歸つて皆さんに逢ひ申したいとは思ひましたが、春から此方いろくとお世話になつて居た、れ方がありましたので、その方に何んのお禮もせずにな別れ致すのが、何んとなく心咎

めに感じましたので、遂に遅なほりました次第です。』と、京ちやんに別れし南風の朝が如何に心細かつたかを思ひ浮んだのでせう。瞳孔は涙に濡されて、自ら愁の様子が見は

れて居ますので一同は不審さうに

『子之助さん、春から此方世話

になつた、お方ツて何處のお方な

のだい。』と、聞かれましたので、

實は京ちやんと言ふ七歳になる兒

があつて、その京ちやんが自分の

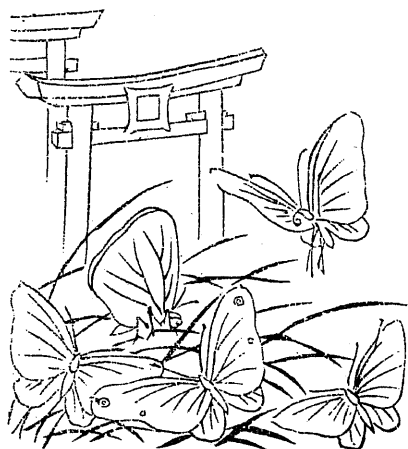
遊び友達と成つた事やら。雨で翼

を傷めた事やら、薔薇の花があつ

た事やら。草の葉へ引つ越した事やら。京ちやん

に別れた事やら。何にから斯にまで一々話します

ると一同も初めて。



『京ちやんと言ふ兒は、親切な慈悲深い、別段な兒だなり。』と感心して、賞めました。

すると、大きい蝶が申しませうのには。

『京ちやんと言ふお方のご親

切を、我々一同は感謝しなけ

ればなりません、ですが我々が

お禮を致すよりも寧ろ神様にお

願ひ申して神様からお禮をして

戴いた方が好ではありますまい

か。』と申しませうと、

『その方が宜いでせう!』と

直ぐに一同が賛成をして、一の

鳥居二の鳥居、三の鳥居と順々にいって、御社

の前へ整然と並びました。

『お願ひ申します〜。』

『ハイイ。』と言つて、暫くすると、御社の扉がギーンと開かつて中から出て來ましたのは、奇麗な身の、透るほど薄い翼を持つて居る、紅蜻蛉でした。一同を見るより。

『これは、蝶々さまでムりますか、お珍らしいです。』

『ハイ、只今戻りました、何卒神様へお取次ぎを願ひます。』

『只今お歸りでムいますか、餘り皆さんがお歸りが無いので、神様も大層御心配をなすつて入らつしやいました。ご遠慮なく、此方へお這りなさい。』と言ふので一同が、お宮の内へ這りますると、神様も大層御満足で、莞爾々々お喜びなすつて居ります。

『只今歸りましてムいます。』と蝶々一同が御前

へ平伏致しなすると。

『皆も達者で歸つて呉れて何により嬉しい。さあ是れから皆が春の野と夏の野で何んな面白い事をして遊んだか、物語しなさい。』と言ふので、一番大きい蝶が恐る／＼首を擡げまして、小蝶子之助が京ちゃんにお世話に成つた一仕始終を物語しますると、神様も非常に御感動なすつて直ぐに京ちゃんのお所へお使を遣りましたとさ。

(守り神様の巻をばり)

傲慢な男

小島松之助

一人の傲慢なる男がありまして、西瓜圃の傍にある榎の木の根に腰をかけて息みましたが、じつと上を見て榎の實の結つてゐるのを眺めて、獨り

頭を振りながら、

「さて、此の大きな樫の木に、あんな小さな實
が結つて却つて、あの、細い蔓には、あんな大き

を打たれた、若し、此樫の實の大きさが西瓜の様で
あつたら今に此鼻は潰されてしまつたらう、し
て見ると、やつぱり私しの思つたよりは都合よく

な西瓜が結るとは、何ん
と不都合な話では無いか

出来て居るのだから。

若し私が世界を造つたな
らば、樫の木に西瓜を結

大きな 樫の木が 大かぜで ねごとひき
ぬかれて すゝきのとこえ とばされて
すゝきさんわ、小さな なりをして よく

笑ひ草

三河 近藤とさ子

らせて、あの蔓には樫の
實を結らせる様にしたも

ふきとばされませぬね といいますと、す
ゝきわ あなたわ かぜと けんかするか

わたるものは食ない
妾しの隣の鎮夫さんとい

のを、不都合なとだ」と
獨り言を云ふて居りまし

ら いけない わたしわ かぜに したか
つて うつむくから ふきとばされません

ふ今年六才になる男のお
子さんが、何時も妾しの

た。すると、樫實が一粒
落ちてきて、この人の傲慢な鼻先を打ちましたの

話をして頂戴、御菓子を下さいといひます。或時
妾しが、鎮ちやんいゝものを上げるから、食べま

所へ遊びに来まして、お

で其男は吃驚して

すかと申しますと、何でも食べると申しますから

「嗚呼、私しの傲慢が過ぎたもんだから、忽ち鼻

すかと申しますと、何でも食べると申しますから

戯に側の猫火鉢を出して、さ此を上げるからか
上りといいましたら、鎮ちゃんはお祖父さまが
わたるものは食べてはいけないと仰つたから、夫
はいやだよ」といいました。

二番ばえ

肥後 獨醒軒主人

私の祖父の若い時であつた話です、明治の御代
でなく、天下様の時であつた或る年の秋の祭りに
家中の二番ばえ（士族の二男株です）五六人來て
一週間から滞留つて、お酒をのんだりお飯をたべ
たりして、何時までも歸る摸様がありませんから
祖父は大に困りどりがなして此の二番ばえを歸さ
うーと思つて一つの考へをめぐらし、えん側の風
鈴に墨黒々と一首の歌を下げました

刈り跡に又も生えたる二番ばえ

どーも稻とは云ふに云はれぬ

（稻はいね歸れの義）

これを見て二番ばえの士族等は皆々すすむと歸
つたそーです。

懸賞問答當撰ひろー

- (一) 一羽の鳥をにはとりとは？
 - (二) 幾つあつても じゅーばこ（重箱）とは？
 - (三) 着るものでないに きせる（煙筒）とは？
 - (四) 一枚の紙をはんし（半紙）とは？
 - (五) 真中を通りながら はし（橋）を渡るとは？
- 一 等
- 姫路市五郎右衛門邸 大竹さく子
- (一) 一羽の鳥を千鳥といふが如し。

- (二) 一ツの箱を文箱といふが如し。
- (三) 畳まれのぬものを畳といふが如し。
- (四) 一枚の紙を唐紙といふが如し。
- (五) 五城の前を手ぶらで通りながら負うて(大手)通るといふが如し。

●二 等

- 福井縣大野郡平泉寺村 前田 祿子
籠野小學校内
- 一人の女でさへさんば(産婆)といふが如し
- (二) 幾ツ取りても判取帳といふが如し
- (三) 着る織物でもきぬ(絹)織物といふが如し
- (四) 一枚にても唐紙といふが如し
- (五) 中へ投げてもふち(淵)へ投げるといふが如し

●三 等

- 香川縣綾歌郡坂出町 中川 よね子
西通町須崎六次郎方
- (一) 一羽の鳥を千鳥といふが如し

- (二) 一つあつても唐鍬といふが如し
- (三) 頭に着るものを頭さん(巾)の如し
- (四) 一枚の紙を唐紙といふが如し
- (五) 真中を耕しても畑を耕やすといふが如し

右賞品 (先月十九日發送せり)

- 壹 等 教育童話體內めぐり 金昌堂發行
- 二 等 兒童候文例 同 上
- 三 等 唱歌菊水旗 中村秋香 作曲
梁 摩子 作曲

皆さんに申します。答はなるべく問に縁の近いものが宜しい。夫から一の間に澤山答を附けてくるのはいけません。試験の問題だつて其譯でしよー

(やまゝとの翁)

●この次の懸賞

- (一) 起きて居るものを寝て(猫)とはこれ如何

(二) 虚言をつくことを法螺を吹くとばこれ如何

(三) 一疋の獸をう、(ぎぎ) (ん)とはこれ如何

(四) 見て酌みながら みずくむ(水酌む)とはこれ如何

何

● 切期限 本月二十日まででに到着の中で撰ぶ

● 解答は封書に限る 封紙には婦人と子とも投

稿と記すこと

● 東京本郷區龍岡町三十四番地東基吉宛のこと

● 當撰披露は第十號で 但し賞品は九號發行前

に發送します。

海水浴に行つて水に

溺れぬ法

皆さん屹度、此月は海水浴や川泳ぎに居らつしや
るでしよー。翁は一つ見出しの様な甘い工夫を教

へましよー。他ではありません、水に這入る時、
膝の所へ墨で輪を置いて置いて、どうあつても、
夫よりか深い所へ行かない様にするのです!!!

氷の誠

暑くつて〜といつて ガリ〜氷を噛る 腹の中
は忽ち、零度の温度に冷へ切つて行きます。よく
ないのに極まつて居ますはね。氷は物を冷やすの
に使ふのなのに、夫をもどかしがって いきなり
噛り附くのは寒い時に 火で温めて食べるのが面
倒だといつて、いきなり 生の火をばうぱり込む
のと全いでしよー。ねー 可笑いじやありません
か、身体が大事なら、そんなことは しないもの、
ことさら 虎刺拉などはやる時には!!!

(やまとの翁)

家庭



子供に聞かせる話につきて二二

東 基 吉

寓言や童話を子供に聞かせることの効益は、前に申しましたが、こゝに寓言や童話を子供に聞かせるのに反對を唱へる人があります。其人の申すには、つまり寓言や童話は子供に偽を教へるのである。狼が物いふとか、猫が話をするとか、桃の中から桃太郎が生れたとか、雉や猿や犬などがお供をして鬼が島へ出掛けたとか、丸でありもしな

い作り話を子供に聞かせるのである。これでは親が子供に虚偽を教へる、子供は偽を覺えるのだとかういふのですが、なる程一方からは理屈もありません。

併し同じ偽りと申すにも種類があります。悪い目的を達するため偽と、高尚な想像の作用の結果から出来る偽りとです。同じく偽といふもの、其性質が大變に違つて居りまして、偽といふ同じ名を以て覆うて仕舞うのは、後の方に取つては聊酷です。即前のは、例令ば罪を犯して之を隠すとか、人を陥れて利を得やうとかいふ時に吐く偽で所謂盜賊の始めだと申すもの、之は無論罪です、子供に此んな罪の種を播く様な話などは、無論不可ないです。併し後の方は、丸ツさり性質が違ひまして、これは總べての文學上の材料と

なるものです、總べての大文學には想像の力を缺くことが出来ない、有名なホメールの文學にしてもどの國の神話にしても近代の妙文傑作にしても悉く些少の事實を材料にして之を非凡な想像の力で着色したのである。つまり想像力の非凡な者の手になつたものほど、其文學上の効益が著大なのであります。併も之を想像の結果だから直ちに偽りを教へるものだといつて排斥しませうか。古い我國の神話や、遠い希臘の英雄時代の詩文はさて置いて、白髮三千丈 依憂如此 長といふ、何處に三千丈の白髮がございませう 鶯の凍れる涙今やとくらんといふ 鶯に涙が出ませうか、よし出るにしても涙が果して凍りませうか 併も吾々は之を偽りである、罪であるといつて排斥し去りませうか。

寓言や童話はなる程造り話です、或意味の虚偽です。併し之は彼の想像的偽、或は文學的偽りである以上は、たゞ其點だけで排斥し去ることは決して出来ない。高言童話は即、兒童文學である、幼年文學である。大人に文學の必要ある如く幼兒にも亦必要があるのです。

か様な考で寓言童話といふものを見て、さて其中で前に申した様な材料は取り除きたいと考へます。

大事を取り過ぐることに

ふみ子

幼兒は實に可憐なものでございます。また尤もかよわいものでございます。この可憐なる、かよわい幼兒に對しては、十分の愛情と、注意ふかい

保護とを與へなければなりません。けれども、若しあやまつて、あまりに大事を取り過ぎたり、愛に溺れたりなどいたしますと、幼児はこれがために大へん悪い影響をうけます。即ち斯様な取扱をされた幼児の普通は非常に我儘で、きゝわけがありません。また、すべて、身心の鍛錬といふことは少しも出来ませんで、何事に對しても勇氣がなく、卑怯で、依頼心が強うございます、そればかりではなく体力、智力の發達もよろしくありません。相互によく見ることでございますが、大事を取り過ぎる人は、一寸幼児が高い處から飛ひ下らんとしたり、また溝などまたがうといったしますと「そら怪我をする」、「あゝあぶない」など申しまして、幼児自身がとんだり、またいだりすることを許しません、直ぐに禁止するか、また、自ら

手を出して助けます。もとより幼児のことでございますから、自分の力もはからないで、年上の人との眞似をして、無暗に高い處から飛ひ下りようと企つることもありませう。随分危険な場所を自分獨りで歩もうとすることもありません。ですから、幼児の世話をする人は、よく氣をつけて、幼児が若し力不相應のことをしようとして企てましたならば、手早く禁止もし、助けも與へなければなりません。けれども其他の場合は、よく注意して放任し、幼児自身の働きに任せるがよろしいとおもひます。これは時として、不親切の様に見えることがありますが、幼児のためでございます。幼児に對する眞の親切でございます。高い處から飛ぶとか、溝をまたぐとかいふ様なことは大人の目から見ますと、實につまらぬことの様でございますか、幼児

に取つては、なか／＼さうではありません。丁度
 大きい小供か器械體操をしたり、大人が六ヶ敷事
 をすると同じ事で非常に身心が鍛錬されます。け
 れども無暗に大事を取り過ぎて、幼児が折角しよ
 うと思つた事を度々禁止いたしますならば、だん
 々／＼心が挫かれまして幼児は自分で事をしようと
 いふ心が少くなります。自分で身も心もはたらか
 すことが少くなりますから自然に身心共に十分發
 達いたしません。また、始終あぶない／＼といは
 れますから、極々やさしい事でなければ手を出さ
 なくなりません。困難辛苦までも胃して事をしよう
 といふ勇氣はなくなります。無暗に助を與へられ
 ますから依頼心がつよくなります。其影響するこ
 とは決して少くはありません。私は曾て二十七八
 年の戦役後 ある兵士から次のやうな話をききま

した。

「私はちよいさい時から、おぶない／＼といつて
 育てられたものですから、まさかの時にどうも
 氣がくれがいたして困りました」
 これは私共がかかる／＼しく聞き過してならぬこと
 ではありませんか。進むべきときに進む勇氣の
 ない者は、なすべきこと、守るべきことに對して
 もまた勇氣のない者でございませう。

學 校 病

醫學士 長瀬復三郎

此中に數へらるゝのは近視、脊椎彎曲、消化不良、
 頑固の頭痛、神經衰弱などです。統計上兒童が學
 校に入つて後之等の病にかゝるものが澤山ありま
 す。

(1) 近視

學齡以上の兒童が小學から中學と段々進むに従つて近視の比例は多くなる。又生れながら近視の者もありませんが、多くは學校で明かでない活字の本を讀んだり、又暗い處で物を見たり。前に屈んで本を讀んだり字を書いたりするやうな人爲の原因に由るものも澤山あります。又屋外で遠方を見て遠い處にあるものを見るやうに目を調節することの少ないのも近視の大なる原因です。一体網膜に物の影のうつるのは糸狀軸と水晶体の彎曲の度に關係する物である。處が近視となると其糸狀軸が長くなつて網膜の上に物体の像がうつらなくなるのである。近視を豫防するには教科書の活字の如何、或は時々郊外の青い茂りを見る等近く目をつけないければ見えないやうなことを永くつゞけないで遠距離の物をも見るやうにするのがよろし

い。

(2) 脊椎彎曲

之は學校時代の兒童に多くあつて右側に傾くものが多い。其原因は人は幼時から右の上肢の筋肉をつかふことが左よりも多くをして筆記などには首を左にまげ右手を机上にかけて右の肩を前に出し身体をねぢらすやうのことが多くあるからです。又机の高さ、腰掛の不完全、光線の不十分などは大に關係するものです。又常に裁縫をして居る筋肉の薄弱なる女兒にも随分澤山側彎があります。凡て机の高さ、腰掛の具合、姿勢などに氣をつけることが必要です。

(3) 習慣性頭痛と習慣性衄血

此二は學校に於ける腦の充血が原因になるものです。そうしてこういふことが起ると空氣が不潔になつたのではないが、室内の溫度が不適當ではないか、又腦及神經

病の先驅ではないかといふことを調べなければならぬ。

りませぬ。さうして此二は年齢が進むに従つて増す

もので、よく原因を調べて過度の疲勞させること

を避けなければなりません。

(4) 神經衰弱 之は精神を過度に苦めることの多

い生徒に澤山ある病で學科の非常に多い時又は試

験の前後に精神が勞れて鈍くなつて頭痛を起し一

の精神病の原因となることがある之等は須く授業

を節して体操をさせるか又は郊外に散歩させるが

よろしい。もし又其生徒がアルコール性の物や烟

草を嗜むならば嚴に之をとめなければなりません。

又遺傳の精神病をもつて居るものは特に注意

しなければなりません。

(5) 消化不良、貧血 此二は單に學校で起るもの

ではない。主なる原因は家庭にあつて寄生虫、出

血等に原因するものが多いのです。

今昔いろいろは料理

石井泰次郎

(ね)

ねり玉子

ねり玉子は、衛生薬として菓子店にて販ぐものと、

大方同じつくり方なり。

先玉子十個をねりて、能くかきませ、鹽少量と砂

糖多くと味淋をいれて、かきませて、白角天二本

ほどを水につけおきて、しばらく細かに切て、水

四合ほどの中へ入れて、鍋にて炭火にかけてとか

して、玉子の方を馬尾篩にてこして別の鍋に入れ

て、右の角天とかしたるを、馬尾篩にて漉して、

冷しおきたるを合せて炭火にかけて煉りつむるな

り、さて煉り合せて、ブリキの箱に入れて冷して
 かたむるなり、切方は好次第にてよろし。

砂糖、鹽の入れかた何たびも試みてつくるべ
 し。

(な)

長崎煮生姜

生姜をへぎて、砂糖、醬油にて煮染て、道明寺糖
 をかけて出すべし。

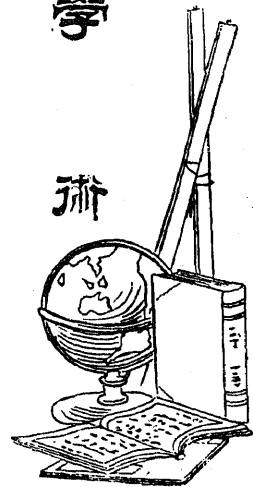
なまりかつを

なまり鯉をふるして、廻りに竹串をあて蒸にて巻
 て、わら火にて焼て、さきて、煎物、又は敷葛な
 どにて出すべし

しきくずとは、あんかけの如く、葛粉をときて
 醬油と味淋とを合せたる汁に入れてあんにつく
 りたるを椀のそこに平らにしき入ることなり

學

術



蜜蜂の話

在農科大學 驚 水

蜜蜂と申すものは諸君も御存じの通り余程伶俐
 な虫でありまして昆虫類も多き中に、蟻と此蜜蜂
 はどよく労働に堪へそうして規律の正しきものは
 ありませぬ。

蜜蜂は實に團体心に富だ動物でありまして、常
 に少くも一万五千匹多きは三万匹以上も群居して
 居ります、冬は其巢の中に蟄居して居りますが、
 春にもなりて野山の花がちらほら咲き初める頃と

なりますと、そろ／＼出掛けて働きはしめす、

寒暖計の七十度内外、即ち四五月頃ともなりす

と世間は花のさかりで採集する所の蜜は野にも山

にも満ち／＼て居ります、巢の内にはずん／＼子

供が生れて同族は日々蕃殖して参りますから各

其擔任の部所に付て一生懸命に働きて冬籠の準備

をします、そうして極大暑中は暫く労働を中止す

るのであります、が實によく定たものであります。

蜜蜂と申ても種類の多きものであります、委し

くいへば一朝一夕に盡すことではありませぬから

極めて簡単に述る積りであります、然し其

種類

の大別だけでも日本蜜蜂の外に、獨逸蜜蜂、伊太

利蜜蜂、埃及蜜蜂、亞弗利加蜜蜂、マダカスカル

蜜蜂、とかやうに別れて居りまして皆それ／＼に

特長があります。日本蜜蜂などは性質が温和で能

く働きますが、他國のものに比して大群をなす事

が少い、それと採集方が複雑なためがありが

す、伊太利蜜蜂などは日本蜜蜂よりは其体も大く

採集方も非常に周到であります。

倍て其一團の内には

雌蜂

は一匹より外ありません、即ち其れを蜂王とも、

女王とも申しまして、一群を統御して居りますの

と卵を産むのが女王の職務であります。

雄蜂

は一群の中に、八九十から百より、多きは千もあ

りましよう、其れを遊蜂または居候といひます。

其居候は蜂王に交配するのが役目であります。其

他の二萬乃至三萬もある蜂は皆

働蜂

といひまして、これは雄とも雌ともつかぬ中性のものであります、此働蜂はそれ／＼部所を定め働きます、或は巢を造るもの、花粉をとるもの花蜜を吸ひ來るもの、粘蠟といつて巢の材料になるものを求むるもの、水を運ぶもの、番兵の任にあたるもの、斥候に出るもの、内に居て子供の養育を受持つもの、巢の掃除をするものと、皆それ／＼定まつて居まして、其職々を、脇目もふらずに働くのであります。

蜂の形は、雄蜂は後体が圓くなつて居て、蜂王は長く尖つて居ます、働蜂も尖つては居りませんが蜂王の様には、長く尖つては居ない、また蜂王の持つ居る刺劍は、彎曲形であります、これは、單に護身用でありますが、働蜂のは其れと變つて、此

劍を利用して、色々仕事がありますから、蜂王のとは形も違つて眞直であります。

そうして雄蜂は劍はありませぬ、働蜂は自分で花粉や花蜜を取て來て、其れを食しますが、蜂王と雄蜂は、常に其働蜂に給養されて居るのであります。

此群蜂の中にて、蜂王の勢力といふものは、非常なものであつて、其巢房なども別になつて居て働蜂が多くよつて種々滋養物などを澤山供給します。

蜂王は前にも述べました通り、産卵の職務がありますから、化生後三日も立つと巢から出て雄蜂に交接します、その交接後、四十八時間すると産卵を始めまして、其れから毎日／＼、多くの卵をうみます、凡そ一日に少くも七八百、多きは二三千

も産みて、一年には四万乃至七万位を産みます、
そして蜂王は四五年から八九年位も生存するもの
であります。

もしまた蜂王が死するか、或は産卵をしなくな
ると新に生れた蜂の内から撰出して、其れに働
蜂が非常に滋養はかりを給して、新しく蜂王を仕
立てる事がありません。

そこで

分封

といふ事がありません、其は五月の初めから、六月
の末までには、蜂の数が非常にましますから、其
内に新蜂王を選んで、其れを仕立て、其新蜂王の
十分發育した時を見て、新居を求めて、一群分離
する事があります、まづ舊蜂王が、一群即ち働
蜂一万五千程、雄蜂百程を率ゐて、其れにまた、

二十八
當分の糧食と、蜂の巢の材料なども悉く用意して
行きます。

いざ分封といふ時になると、其一群はうち揃ひ
て舊巢を二三回週翔して、其後大木の枝などに群
集して、先に出しやりました斥候蜂が適當の場處
を報告するのを待て居ります。

やがて斥候蜂が歸りて来て、蜂王につげますと、
それからまた一群整々と新封土にくり込みます、
万一此途中で蜂王が死す様な事でもあると、群蜂
は悉く秘散して舊巢に歸ります、決して自分等の
みで新巢を経営する事はありません。

養蜂家は此分封期を利用して箱の數を増加する
のであります、其を人工分封といひまして、其につ
さての方法などは述べ立てますれば限りがあります
せぬから、悉く略しまして、他日また詳しく述る

事もありましよう」

眼の 話 (其二)

在福井 本 郷 生

ランプと凸レンズとにて得らるゝ如き倒しまなる像が網膜上に出来るとせば、物は常に倒に見えねばならぬ、ざるを、實際然らざるは何故ぞとは余が學生より屢聞く質問であります、之れは深く考ふれば何も怪しむに足らぬことで、つまり人間が幼時より直立したるものに遇へば、常に必ずその倒さの像を網膜上に得たるが爲め、長き経験の結果で倒しまなればこそ直立して見ゆるやう至りたるのであります。

次に來る質問は、物の像は二つの目に一つ宛出來るにも拘はらず、吾れ等が之を二つに見ずして

一つと見るは何故ぞと云ふことであります、讀者此疑問に答へんとせば、先づ試みに鉛筆を出し指を以て左右何れか一方の目の下を強く壓しつゝ之れを御覽んなさい、其鉛筆は二つに見えます、否



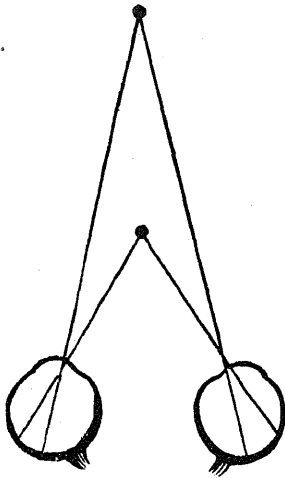
鉛筆に限らず其邊にある時計も筆筒も書物も花瓶も其計も筆筒も書物も花瓶も其他凡てのものが二つに見えます



ます、次に又二本の指を四五寸隔て、鼻先さに出すと左圖の如くし、其何れか一方に注目して御覽んなさい、他の一本は必ず二本に

見えます、此等の現象は一見吾人を迷はすもの、如く見えますが、實は上の疑問に對して吾人による説明を與ふる材料となるものであります。今少

しく精しく申しますれば、一体吾人の眼球の後方は一面に網膜を以て蔽はれて居り、一面に光に感ずる性があるものです、とりわけ明瞭に感ずることの出来るは、其前面よりの突き當りのところであり、此點を黄點と申しまして、それは大人の目に於ては横の直径が六厘餘、縦の直径がその三分一計りある小さな橢圓形をなしてあります、

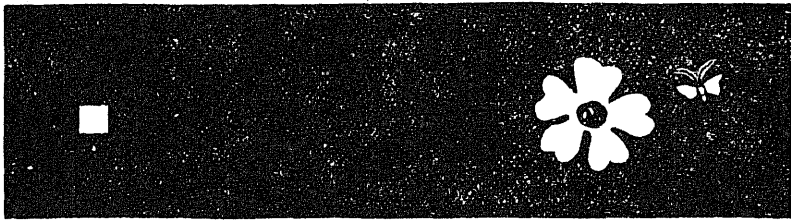


吾人が物を注視するときに、いつも像が此處に

出来るやうに眼を向けます、而して二つの眼より

得たる二つの像が兩眼共に網膜上の此部分に出来るときには、物が二つに見えずに一つに見ゆるのであります（之れは經驗上然ること、前に倒立したる像をもて直立したるものを見と全一理なり）然るを若し或る事情の爲めに兩眼が共に像を此部に得ることが出来ぬやうの位置にあるときは、即ち換言すれば兩方の像が網膜上の別々異なる部分の上に生ずるが如きことあるときは、像は必ず二つ別々に見ゆるのであります、前に試みたる例の如きは即ち之れが實例で、一は指にて押したるが爲め眼の位置をくるはせたるが爲め、他は一方を注視したるときには全時に他方の指の像は此黄點の上に来ることが出来ぬからであります（上圖を見よ）

少しく話しは違ひますが茲に一つ面白い實驗が



あります、讀者は顔を上方の上に差出し、右眼を花と蝶との上に左眼を白き方形の上に持ち來し、左手を以て左眼を閉ち、右眼を以て左方の小方形を注視しつゝ、徐々に顔と圖との距離を變更して御覽んなさい、七八寸位のところに於て花が全く見えぬやうになるのを見ませう、それよりは遠くして且つ小なる蝶が見ゆるにも拘はらず、之れはそも何故でありませうかと、云ふに

網膜上の或る部分、即ち視神經の束が眼球に連る部分に於ては、其名の盲點と呼ぼる、如く光線に感ずる性が全くない點があるのであります。而して此部分は前に所謂つき當りの部分即ち黃點より少しく内方に偏し居るので、上に陳べし如くすれば眼と圖との關係上大圓の像は恰も此盲點の上に出來るからであります、讀者は上の圖を見て自ら此理を了解せられんことを望みます。

鐵道の話 (承前)

菊

亭

二鐵道旅行に就ての注意

永らく鐵道の沿革めいたことに就て御話をいたしました、これからは鐵道旅行をする方々の御便利にもとの婆心を持ちまして、少々御注意の點

を申上げます。尤も當今は何人も鐵道旅客取扱に就ては随分御存じのことなれば、之より申上ますことも或はそんなことなら、此の雜誌の貴重なる紙面を埋むるにも價せぬことだとの御考をおこされる方があるかも知れませんが、何卒其邊のことは餘り嚴敷おせめにならぬ様に願ひます。

今年の十一月以降は、新に實施せられました法令によりまして、鐵道の取締りもなか／＼嚴重になりました、その中の多くの規定は鐵道營業者に關する規定でありますけれども、旅行者に關する規定も可なり出來ました、其結果なか／＼六ヶ敷ことになりました、先日も申て大笑ひを致しましたこととであります、餘り面倒なる法律を設けて取締をする、鐵道に乗る前に一度法律を研究せねばならぬ様になる、さやうなれば一ツそ、政府に

於ては犯則者を出さぬ爲めに法律を學びたる證據を有する人の外は乗車することを得ずと規定しては如何と申した位であります。いつれの途にいたしましても、鐵道營業法並に鐵道運輸規程などは何人にも一應讀でよろしいものとおもひます、不知不識の間に犯則して罰せらるゝことを免るゝ爲といふよりも、自分たちに法律によりて與へられて居る權利を保護するに必要のことゝおもひます。

これより申上げます旅行の注意は、現今鐵道作業局に於て實施して居りますところの事を基礎として申上げます、鐵道によりて多少相違もありませんが、先づ鐵道作業局の例によれば大差ないこととであります。

さて茲には鐵道の乗車券の事に就て申上げます

普通の乗車券のことは、何人も皆御承知のことであ
りますから、これは略しまして特別の乗車券即
ち定期乗車券、及び回数乗車券に就て一寸申上
げます。

定期乗車券は、或一定の期限内、何回にても勝
手に之を携帯すれば乗車することの出来るもの
であります。此乗車券は、普通の乗車券とはことか
はりて、乗車券に記載したる人の外には、決して
之を用ふることの出来ぬものであります。即記名
式の乗車券であります。普通の乗車券は、何人が
之を求めたりとも其買手の如何を問はずして何人
にても之を携帯するものは列車に乗ることが出来
るのであります、然るに定期乗車券はそうはいさ
ませぬから、此點に於て大に趣を異にして居ま
す、定期乗車券は記名式でありますから、心あり

てなすと否とに拘はらず他人をして之を使用せし
むるときは、その時限り乗車券を取上げ、尙通用
期限が残り居るにも拘はらず、賃金の拂戻をも
致さぬことになつて居ります。

定期乗車券の通用期限は、普通の定期乗車券と
學生用定期乗車券とによりて各異なるものであり
ます、通常の定期乗車券は一月三月六月と
になつて居ります。さて又定期乗車券の賃金は期
限及乗車距離の長短によりて賃金割引の割合もこ
となります、一番もとの賃金計算法は一月月に日
曜日が四日あるものと見なし、月の大小を問はず
三十日より四日を引去りて廿六日とし、之に普通
の賃金を乗じ、その得たる賃金總額中より通用期
限及乗車距離の長短により各一定の割合を以て割
引をなして、定期乗車券の賃金と定むるのであり

ます、よつて其割合は場合によりて各異つて居ますか、少くも一割五分多きは五割の割引をなすものであります、定期乗車券はずつと右に申しましたやうなものでありますから、一定の停車場の間を何回となし度々往復する人に對して至極便利にして且やすつくつものであります、

回数乗車券は、定期乗車券とはことかはりて居りますが、つゞるところは定期乗車券は乗車の回数に限りがありませぬが、これには限りがあります。定期乗車券は記名式であります、これは無記名式で何人たりとも之を携帯するひとは故障なく乗車することの出来るものであります、尙その外にこの乗車券は一つの特點があります、抑もこの乗車券は普通の乗車券のやうなものが郵便切手のつながつて居るやうに何枚もつながつて居まし

て、乗車する場合にはその内の乗車券を鐵道係員が切取ることになつて居ります、この乗車券の構造が斯様でありますから、之につながつて居る乗車券の數だけは旅客が一時にこの乗車券を以て乗車することが出来ず、之が今も申すところの特點であります、然しながらそのつながりあつて居る乗車券は、鐵道係員が切取る外旅客が始めから切取りて持參するときは無効になります、之は呉々も注意を要することであります。

回数乗車券は乗車回数五十回にして通用期限は九十日であります、また賃金は普通の賃金に回数乗して、其の總額より二割を減したものであります。



史傳

國學と荷田春滿 (承前)

米 溪

國學の語は實に春滿によりて唱へ出されたり、乃ち我が國の有ゆる學問を含有し、以て日本國民の性格を發揮して、日本の道とする所如何を研究せんとせしなり。支那思想及び佛敎の未だ入らざりし以前の我が國民の思想如何、我が國体の成立如何を研究せんとして古文辭の研鑽を勉めたりしなり。故に此の學は、一方にては神道なるものを其の根底として、古文學は道具としたりしなり。純粹なる道は古文學の上に存するものとし、斯の

國の言語文字を基として斯の國の道を發揮せんとせしものなり。されは文法、歌學、典故の學も亦斯道研究の料たるのみ、日本の真相を知る所以の道たるのみ。之れ國學の本領にして、此に着眼せしは春滿なり。我が文學を基礎として我が國体を研究するを根本の目的とする基礎を定めしなり。時勢は偉人を生ず。春滿は寛文九年を以て生る、(時正に林鷲峯本朝通鑑を撰ひし前年にして、契仲三十歳の時なり) 父は神職にして信詮と云ふ、伏見稻荷の社司たり。弟信名家を繼ぐ。荷田は其の姓にして羽倉を氏とし、初め信盛と云ひしが、後春滿(或は後に東丸、又は東麻呂とも稱す)と改む、幼にして國史律令の學に志し、古文古歌を研究し、博覽にして諸家の末に至る迄涉獵せざるなし。時に儒道盛に行はれて古道振はず、闇齋垂

加流の神道を説き天下を風靡すと雖も、到底陰陽

五行の説を脱する能はず。吉川惟足卜部兼從等の

如きあるも、亦神佛混淆を免るゝなく、彼の支

那儒教の糟粕を嘗むるに非ざれば、乃ち印度佛説

の餘瀝を啜れるのみ、偶々歌道の復古説ありと雖

も亦未だ日本人の道とする所を明かにせんとする

ものあらざりしなり。春滿此に於て慨然志を起し

大に古道を振はんとし、契仲、長流の古歌研究を

繼ぎ、之を基礎として以て神道を發揮せんとす。

而して其の學は多く獨學に得たりと云ふ。

時に幕府の昌平黌甚だ盛にして儒教獨り時を得

たり。春滿謂へらく、之に對して國學の覺なかる

べからずと、是に於て幕府の力を假り東山に國學

の覺を設け大に斯道を起さんと欲し、江戸に至り

請ふ所ありしが、事果さず。其の上書中、國學な

る語あり、是れ實に我が國學を稱する初めなり。

幾くもなく、病を得て京師に還り、元文元年を以

て歿す。

蹈み別けよ大和にはあらぬ唐鳥の

あとを見るのみ人の道かは

とは蓋し其の理想にわらずや。

惜い哉、言、時に用ひられず、不幸早く歿せし

は實に斯道の爲悲むべしと雖ども、醜郁たる薰香、

冥々の裡之に對するもの自づから化せざるなけん

とす、豈徒爾にして止まんや。宜なる哉、享保元

年其の江都に遊ばんとするや、加茂真淵刺を通じ

て、一夕の會、感想忽ち動き、江門一朝の遊は、

其の子在滿をして田安宗武に仕へしむる因をなし

縁て遂に田安侯の眞淵聘用となり、互に夤縁して

國學勃興の氣運をなすもの、誠に偶然ならざるを

覺ふ。

偉人既に逝きぬ、然りと雖ども、風化の及ぶ所決して一代にして爲すなきに終るものにあらず。大風既に波を激す、澎湃として滔天の勢をなし、眞淵宜長より以て篤胤に傳へ、遂に維新の際に及ぶ遮らんと欲するものは碎くべし、支へんと欲するものは壓すべく、風雲巨浪を捲て震天の大業倏忽に定まるもの、抑も亦我が國民的精神の彼の餘烈に薰して煥發せる所以に非ざるか。英魂土に歸してより百六十有六年、王化四海に敷て、皇威遠く海外に振ふ。之皆其の影響の波及する所、恐らくは、春満自からと雖ども、爾く大なるものあるべしとは豫想せざりし所ならん。

今にして之を評すれば或は世界的眼光缺くる所あり、考古に偏して變通に乏しく、自から高うし

て長短補修の策遺す所あるが如きも、時勢に乗じて見を定め、流俗を抽で卓然標識せる所獨り此人にして期すべきを知る。若し夫れ之を九泉の下に起して今日に處せしめんか、庶幾くは撼地の大業期して待つべきものあらんとす。

吁國學の基礎は既に此の偉人によりて定められぬ、而して俯仰今を鑒むれば、所謂國學者たるもの果して如何の状ぞ、人は稱して迂濶となし、而も自から恬たるなり、世は目して悠長、事に疎なりとして而も自から甘んずるが如し。之れ豈國學ならんや。國學は爾く迂濶なるものならざるなり、爾く悠長なるものならざるなり。否、迂濶なるものは國學の精神に非ず、悠長なるは國學の用にあらず、活潑々地、靦々として時と相化し、常に時勢の先導となる所以のものは、豈斯道の精

神に非ざらんや。

世情は終始一定地に固着するものにあらず、時と變じ歳と移る、而して達見の士常に卓然なる識見を以て其の進轉の勢を看破し以て時勢の變に應ず、此に於て風化靡然として行はれ、万世の下、人をして坐に遺風を欽仰せしむ。春滿の如き蓋し其の人か。

維新以來三十年、文化駁々として日に進むと雖とも、斯道獨り舊套を脱せずして世と相背かんとす。吁是れ其の學の否なるか、時の不可なるか。皆あらず、卓然時に超出して世を導くの偉人なきのみ、眞に斯道の偉人なきのみ。

出でよ眞の國學者、人は泰西文物の華に酔ふて之を同化する所以を知らず、世は歐米開明の勢に眩して遂に自國を忘れんとす。吁、是れ明治の春

滿を要するときに非ずや。出でよ眞の國學者、斯の人出でずんば夫れ斯道を奈何せん、吁、此の國家を奈何せん。時は俟てり、世は俟てり。借問す誰れか明治の春滿たるものぞ。否、明治の春滿を出すは誰れの任ぞ。





文苑

歸省

増山三雪子

指をりてさぞ待ちわびん二親は

暑きやすみにかへる我子を

西 升 子

森かげに打ひくはたやちゝ母の

まちにまぢます我家なるらん

森 雅 子

川そひに我を迎ふる人の影

母君も見ゆおとうども見ゆ

板 倉 止 子

父母にまみえん事のたのしさに

あつけざしらぬ今日の旅哉

わまたみし書の話の家つとの

板 倉 藤 子

錦にかへて親にまみえん

大 河 内 桂 子

はらからに持て來し苞を分ちつゝ

喜ぶ顔を見るがうれしさ

奥 村 舉 子

故郷に飾る錦はあらなくに

吾家の庭に百合の花さく

佐 藤 朝 惠 子

夏しらぬ伊豆の海邊に友はあれど

親の御許をまづ音づれん

峯 百 合 子

たまさかに歸りし今日の心もて

いつも仕へん父母の前に

大 竹 伊 勢 子

幼子をともしなひ行きてこの夏は

老ませる母に見せんとぞ思ふ

佐 々 木 文 子

なつかしき家に歸りてたらちねの

優しき言葉さくが嬉し

水橋 康子

なつかしき山もこえたり橋ひとつ

渡らば岸にたれか待つらん

設樂 御幸子

吾門の一本まつも見え初めぬ

昔遊びし野路をこゆれば

鈴木 安子

語るへぎはえはなけれど夏毎に

歸るも嬉し故郷のいへ

印 東 益子

ひと時も早く歸らんふるさとの

親兄弟よ如何にまつらん

印 東 昌綱

今つきし我子の文を手にとりて

明日を待ちわふる親心哉

佐々木 信綱

夏ごとに歸りなれたる故郷は

父いまさねど戀しかりけり

梅雨晴

横山 碩

晴れぬとて喜ぶいまもなかりけり

村雲あやしきみだれの空

諏訪 忠元

さみだれは今朝しもやみぬ梅の實の

うみしころも晴れ渡りつゝ

矢田 香園

梅雨のはれし軒端をながむれば

洗ひてきよき松の色かな

くちなしの花

東くめ子

くちなしの花のをとめで物いはで

たいうちをみてうなづくがあはれ

たむくべきかくつきどころ道遠み

手折りこし花はしをればてにけり

ほたる

きよき小さき

橋のたもと

ほたる飛びかふ

みやこに知らぬ

聲もしどろに

五人みたり

ほたる来よこよ

つめたき水も

露けさあまき

なびしき野邊は

花さく園に

つねを

里川の

夕まぐれ

うす闇の

すいしさを

うたひゆく

子供等と

やよはたる

こゝにあり

草もありと

星にまかせ

つとひきて

あそぶ木かげに

月いでぬ

一朝の樂しき

楓

八月一日朝またきへ一年中の骨やすめにと、古郷の家にある私の、他に爲すべき務もなく、否なきにあらねと、朝な〜四人の弟をつれては山又は海の邊をそゝろありきする、これせめては身体健康にもと心掛けたのである。今朝しも下り松に出かけた、此處は大坂通ひの流船の着く處で、丁度下り船かゝると見えて、二三輛の車が別に着させず、石斗りの道をころ〜とねむげな目をして、指捧につかまる東夫は、問屋の方にゆいた。

海は一面の潮きりで、遠きも近きも淡き衣を被つたようにとんやりして居る、満ち来る潮は幾千

の小波となりてさわかぬほとに汀を洗ふて居る、
 海の果、丁度雲と接する處あたり、今しも太陽
 が昇つたと見え、所在は分らぬか一面紅く色とり
 て、もやを被つた向ふ岸の人家は、淡墨を流した
 様にぼんやり黒すんで、恰も着物の裾模様にもと
 思つた。足許の夏くさは、露を帯んだまゝ、いろ
 く々に咲きみたれ、そよ吹く風になひいて居る、
 右手の畑は一面の小豆の花が淡すみれ色に咲き匂
 ひ、我をむかへて笑める様に見える、見下す磯に
 は主なし小舟か三そう波のするかまゝに身をまか
 せて居る。一年ぶりにて此の美しき景色に酔はさ
 れ、幼き折此處に遊びしことなと交々思ひ出て、
 しはし我にあらざりし刹那、何處ともなく涼笛の
 音が　　ブーブーブー
 思はず我に返つた折しも、一人の弟が

お姉さん涼笛はなりましたが、船体か見えま
 せん。

今一人の弟を促して小高き處に登り、様々の事を
 して見んとするさまが、丁度小兵士か斥候となり
 て敵艦をでも探せよりに見えた、笑める私は如何
 に骨折つたとて、もやの晴れぬうちは見えぬこと
 を覺した、それから四人をせき立て、萩の花、水
 ひき、川きくなど種々の花を折つて問屋まで進ん
 たが、船はとうとう何か分らなかつた、その間に
 二むれ三群の海水浴の歸りに遇つた、其中の一人
 は、私と小學校を共にした人で、今は三人の子の
 親となつて居る、伯父にも遇つた、兎角する間に
 日も高く昇つたから、暑くならぬうちと五人連れ
 でかけて歸り、朝飯を終るときに時計を見たら午
 前七時であつた。



説
林

本邦古代保育法の一斑（ついで）

下村三四吉

さて、その「ひたす」方法はどうかであつたかといふことを申しませう。先程申しました通りに、語り傳への時代では、貴い身分の人の事ならば、何程か其事が傳はつておりまするが、下々の子供の育て方などに至りましては何處でも同じ仕方でありまして、兎角取り立てゝいふべき程のことはな

いのであります、それを記憶して置かなければならぬ。それですから、こゝでは、貴族もつと狭めていへば、皇室にて、皇子孫方をお育てになつた事柄を擧げて、大略それに依て推定する材料を申上げて置かうと思ひます、到底充分なることは解りませぬ。

まづ、出産については、産屋の事がありますがそれは略しておきます。それで、皇子でも皇女でも、御生れになつた場合には、その御産みになつた方が乳を御上げになるのが本體のことです。しかもそのことの出来ぬ場合がある、さういふ時には種々のことがあらはれて語り傳への材料になるのです。ずつと古いところでは、普通に神代と申してあります時分に、彦火々出見尊が、海神の女尊玉姫を妃となさせられて、孔子様が

御誕生になりましたのが鷓鴣草膏不敢尊でありま

すが、豊玉姫は、牝産を爲された後、直にもとの

海國に御かへりになることになつたので、特別

に御養育申し上げる人々を御定めになりました。

其所に擧がつて居る所のものは、色々あるが、ま

づ後世申します乳母があります。乳母のことは

古い言葉では「ちおも」と申して居ります。「ちお

も」の「ち」は乳の事です。乳を「ち」といふのは、

通例申す血液の「血」と同語で、乳汁も血液も同じ

く身体の一の精髓なのであります、それで同一の

ことばを用ゐたので、乳汁の方は、小供に與へる

ものであるところから、「ちま〜」「て〜」などい

ふやうに重ねて申して「ち〜」となつたのだと考へ

ます。また「かも」とは母といふと同じ意味です。

「ちおも」の外に「ゆおも」「湯母」といふのがある、

それは、湯とか、水とか、または薬とか、流動物

の方を預つて、それを差上げる所の婦人なのです。

それから、「ゆゑ」(湯坐)があります。これは、湯

に坐るといふ意味で、御幼児に湯をおあびせ申す

職掌の人である。これらの外に、モウ一つ「い

ひがみ」(飯嚼)といふものが見えて居る。即ち飯

をかんで、それを柔かにして差上げるといふ所か

ら起つた名です。今でも固いものを母親がかみ碎

いて子供に與へることがあります。それと同じで

皇子様がおひ〜御生長になつて、御飯でも召し

あがるやうになつたとき、それを嚼んで柔かにし

て差上げる役目をつとめるのです。

以上擧げた「ちおも」、「ゆおも」、「ゆゑ」及び

「いひかみ」の四つは、即ち御養育にあづかる宮廷

の一種の役人で、それらを御定めになつたことの

古く見えてゐる一番始めが、この鶴鷓草葺不合尊の御誕生の時です。日本書記に「彦火々出見尊、婦人を取りて、乳母、湯母及び飯嚼、湯坐としたまふ、すべて諸部備行て養し奉る。時に權に他姫婦を用りて皇子を乳養し奉る、これ世に乳母を取りて兒を養す縁なり（漢文）とありまして、この時これらの役目をつとめましたものは、みな婦人と見えます。また、世に乳母を取りて兒を養ふ風習はここに始まりたるやうに記してありますけれど、これはたゞ特別の事があつてここにあらはれたまでい、その實際は、もつと古くよりあつたこととは申すまでもありません。（つゞく）



寄書

お寺参りの婦人と子供（承前）

岩手 凹 凸 子

前の地獄の繪圖で、盗み食ひをすると、鬼どもが集まつて居て目方にかける、さうするとどんなにかくしても隠し切れないでとうとう分つて仕舞ふと、お寺まわりのある白髪のお婆さんがいひますと、側に聞いて居た菓子屋の「悟」という五つ六つになるのが、いかにもこわさうに口をひらひて「それでは、之れからは、お菓子を盗つて食はないわ……お前も……よ」と並んで居たもの、肩をたゝきました。この肩をたゝかれたのは、矢張り

同じ菓子屋の子供なので、この「悟」には弟であつたのです。

また悪い事をする、死んでから地獄にやられるし、善い事をする、あんな花が咲いたり、鳥がないたりする面白い極樂にやられると、和尚さんがいひますと、前の白髪のお婆さんに連れられて来た少女の子はお婆さんの顔をながめて「お婆さん……夫れではあの先達死んだ姉さんも地獄にいつて鬼にせめられて居るの……をらいやだ……」とまだ言ひ終らないに早や涙ぐみました。

このお婆さんのうちではこの頃不幸があつたのです、お婆さんはさも氣の毒さうな顔をして「姉さんは、わるい事をしなかつたから極樂にいつたのよ……」と方なささうに孫の顔に手をかけますと「だつてお婆さん……姉さんは私と喧嘩をした

事があつたんだもの」となは聲高かに泣きだししました、かういはれてお婆さんも答へに窮したらしく、また側に居た子どもたち、私もその一人でしたが、なるほどとその女の子に引かされて、又泣きたくなつたほどでありました。するとさすがは衆生濟度の和尚さんだけ、なか／＼すかしませぬ「坊ちゃん……夫れではね、私は姉さんが地獄にいかないやうに拜んであげよ……かとなしくして坊ちゃんも拜みなさい……」と例の數珠をとつて何やら唱へますと、坊ちゃんも泣きをやめて和尚さんのまねをしました、やがて唱へが終つてから、またお婆さんにすゝり泣きをしなから「姉さんは、極樂にいつたの……」お婆さんもうれしさうに「さうよ……今和尚さんが拜んでくれたから、今ごろは極樂へいつたのよ……」

坊はうれしさにまたもとの笑顔にもどりました、その時側に見て居つた小供らは、悪い事をしても、和尚さんを頼めば、極樂へいかれるものであるといふやうな、いはゞつまらない考へを起こしたらしい、私などはその時實際さういふ風に考へたのでありました、之れは今から考へて見ますると、少しく遺憾な點であります、こゝを今少しうまくやられたなら、いくら功験があつたらうかと、いと残念に思はれます、さて世のご婦人は、今この菓子屋の「悟」と、老婆に連れられた女の子について、いかなる考へを起されなさいましたか、たとへ菓子を取つて食ふのは、小供の所謂自動性であつて、毫もとがむべき點でないとした所で、この悟兄弟は、再び菓子を盗つて食ひましたらうか、又彼の老婆は、その孫の養育上いかに

に地獄繪圖を以て訓誡せられたでありましたよーか否實際この孫のためいかに功験があつたでありましたよーか、これは諸君方のご判断で充分想像のつく所だらうと思ひます。

今私はお寺まゐりのをばなしを致しましたが、之れは私の子どもの時を想ひ出してかういふ事もありましたよと紹介するに過ぎないのであります、みなさんも自分の子どもの時を追想されて、小供といふものはかういうことに氣を引かれるものであるとか、或はかういうとさにはかういう感じをおこすものであるとかいうやうなことを自ら省られて、それを實際に應用することが、頗ぶる肝要な事であらうと思ひます。殊にお寺參りをされるときなどには、大抵修身上のたすけとなる材料は數多いので、又實際にさゝめのあることも

非常に多からうと信じて居ります。で私は私の小供のとき、お寺まゐりに連れていかれたその當時所謂小供心に感じました一節を擧げて、みなさんの子どもを教へ導かるゝ参考に供することかくの如くでございます。

(完)

母と子と繼母 (承前)

林 壽 祐

余は幸にして父母共に健全なるも余が父、祖父及び其弟妹等は幼にして母に後れ、繼母に督せられ備さに辛酸を嘗む、親族中にも母を失ひ往々悲哀の境遇に沈みし者少からず、其言を聞くに皆符を合すが如し。釣落したる魚は實物より遙か大く思はるゝ如く、母存生せるときは左程に思はざりしも母の逝かれた後には一層難有思はるゝなり、

往々憂きにつらさに遇ふ時は「嗚呼母が生きて居るならば……」の嘆息を發せらるゝ事幾度ぞ。

四十八

母に後れたる子は唯にてさへ困難するに、まして意地悪しき繼母に遭遇せんか、其艱難といふものは一通りや二通りの騒ぎに非らざるなり。予の親族に暴れ坊あり活潑にして物に頓着せざる性なるが、一日言會々彼が亡母に及びし時彼は涙に眼をうるませ、物をも言はず頗るしよけかへりたり蓋し繼母と繼子は常に親睦し難く、互に猜疑を起し一言一動に角をたて、欠點を拾合ひ針程の事を棒程に擔き出し恰も仇敵の如くなるを常とす、是を以て性質強剛なる者は漸々と悪性に曲向し、柔弱なるものは恐々憂鬱の餘り神經病を惹起しあつたら此月日を不愉快に徒費するものあるに至る。彼の惘然なる狂人の如きは比較的親なし子に

多く有らんかと思はるゝなり。

されど繼母たるまた随分つらさものなり、已の子なれば小言をいふとも、少し位無理なることを爲すも、人も咎めず小供も恨みず已れも平氣なり然れども繼母となると餘程六ヶ敷なり、食物より衣服言語まで直に世評に上り、枝より枝つき繼母は酷いとか邪見だとか隔てるとか餘計に憎まれ勝なり。子も動もすれば曲りくねり、故更に悲哀の状を粧ふなど其を一々氣にするに於ては、遂に已れの身を損ずるに至るべし。而し又繼母は已れに子なき時は務めて先妻の子に意を注ぐも、已れに子の生ずる時は即之を疎遠に取扱ふもの多し是れ婦人の欠點なり。また少しく枝葉に亘れど婦人の欠點の一例を擧げん。凡そ姑たるものは已れの最愛する忤の妻を恰も讎敵の如く思ふにゐるなり

嫁にも頗る非道の者あれども、兎に角已れの娘となり終身衣食住を共にするものなれば、嫁に悪しき所あれば人知れず之を教訓し、戀に示導するこそ姑の本務なれ、苟も言語に跌きあるか、作業に拙劣なる所ある時は、喜んで誹謗の材料と爲し、浅猿ましくも他人に觸れ廻はすものあり。常に温厚なる婦人も姑となる時は、多少猜疑心に化成するものなり。是に於てか嫁せんとするものは、姑の無き所即ち天にも地にもたつた一人の至重至切の母を失ひ人世快樂の一大部分を削減せらるる、不運不幸の夫を擇ぶに至る是れ豈に奇々怪々の現象にわらずや。

今東京に遊學せらるゝ諸嬢の中には、必ず母を失ひしもの有らん。さなきだに涙脆き他郷の客、社會の人は冷淡に郷里の繼母は無情なるにつけ餘

るに亡母を憶出だし、悲哀やるせなく天を仰ぎ地に俯するの嘆なからざるを得ざるものあらん。

母なし子の一生不運の底に沈むを見るにつけ現に母となれる人、及び後來母と成らんとする妙齡の諸氏は、身体を健全にすべきこと第一の要務なり。一朝不幸にして妻たり母たるものが彼の世に逝去らんか、唯に辛酸を其最愛の子女に遺すのみならず、其夫其親に於ても非常なる失望と困難を受けしむるものにして、一家團樂融融たる和樂は忽ち消散し、悲風慘愴宛がら暗夜に火の消へたるか如し、是を以て婦女たるものは苟も攝生を怠るべからず、近來物價騰貴に従ひ診察料及び薬價は非常に高値となりければ、貧賤なるものは醫藥を服する能はず、病症の如何を知る能はざるに、狼狽に賣藥などを用ひ不知不識の間に貴重なる生命を損

するもの珍しからず、豈慨嘆の至りならずや。然れども吾人は婦女子の健全を冀ふといへども、また彼の佞姦にして無情なる婦女はドシク息滅し其悪性を遺傳する子孫繁殖の途を切斷し、速に此社會より悪性的人間を根絶へせんことを欲するものなり。

太陽の光鮮かに世界は漠々として廣し、二手二足の動物は幾万幾億となく其間に活動し、笑ふものあり、喜ぶものあり、怒るものあれば躍るものあり、千差萬別口言ふべからず、筆記すべからざるも、幼にして母に後れたる程、人世の大不幸はなし、是れ人は感情的動物なればなり、觀よ憂さも嬉しさも皆彼等か涙の種、彼等は將來如何程立身出世するも決して満足の人といふべからず、思うて是に至らば世の母たるもの充分攝生を戒め其

身を大切にせざるべからず。また子たるもの貴賤
 貧富を論せず、永く此世の快樂を享けんと欲せば
 宜しく身体を健全にし、能く業務を勉勵し、以て
 至仁至愛たる母の心を安んぜざるを得んや。

(おはり)

Look in fear upon the guilt that
 might have been thine own.

恐を以て、己の陥らんをせし
 罪惡の上に眺めよ。

夏の家庭



や、て、

團 樂。ストーブの下、火鉢の邊、快談相親しむ
 冬の家庭は、げに温かきものなるも、夏の家
 庭亦一入のものにして、今や正に盛夏。學校は凡
 て休暇となり、笈を遠きに負ふの子弟も歸省し、
 一家團樂、綠翠滴たる樹蔭、涼風送くる窓下、あ
 どけなき幼兒の御伽話、活氣はやれる青年の夢想
 或は希望を語るあり、或は經驗を述ぶるあり、子
 女の進歩は其の話頭に表はる、家庭の幸福和樂何

物か之に如かん。

睡

眠。安逸を貪ぼるはこれ人情の常、今や始業に後る、恐なく、明日の豫習の必要なし、茲に

於て朝寢と午睡と行はる、かくて神身保養の休暇は反つてこれが懦弱を來たす。睡眠八時間を以て足れりとす、此理兒童の能く知れる所、されど之を已に制する頗る難、父母兄弟の宜しくつとめ監督すべきの事。

朝

顔の栽培。睡眠を節する頗る難、されど、小供に之を強ゆるなくして、却つて彼等をして樂

んで實行せしむる一手段あり。即ち朝顔の栽培なり。露を已が友として、朝な、夕な、に咲き出づる花を見ては、彼等の心中自ら美感を養はる。加之彼等自らに播種せしめ、水まかしめんか、植物生長の次第は彼等能く之を會得す。更に進んで其の花

の解剖を行はしめ、結實の有様を観察せしめんか、彼等の得る所其幾何ならん。

金

魚の飼養。これ亦彼等に娛樂を興ふると共に魚類につきての知識を興ふるもの也。陶汰に

依りて其の形色の變化する有様、其の進退するに如何なる作用を以てするか、各鱗特種の作用等は外見上直ちに之を説明するを得るなり。更に進んで其の体の構造、其の生理作用等を述べて彼等をして精細に之が觀察をなさしむるに至つては一尾の金魚の興ふる知識實に偉大なるべきなり。

虫

の飼育。これ亦博物學の智識を興ふるもの。庭前の草木撒水に蘇生の色を呈し、人皆晚餐

終りて夕涼晝の苦熱を忘れ、蚊遣火の邊、團扇に風を起こし、長幼相談するの時、擔馬の音に和して鳴き出る鈴虫松虫、がちや、ちや、さり、さり、其

の音の自然なる、其聲の清韻なる、樂的の趣味は自らに養成せらる。更に之を博物學的に觀察せんか、彼の美音は彼等の口より發する聲にわらずして、實に其の翼が頗る敏捷に相接觸摩擦するより生ずるを見るなり、此等の現象實に興味深きもの。

虫

聲につさての聾。リン／＼の鈴虫の聲は其の調子甚だ高くして、吾人の耳朵をうつや頗る

強し。然るに全く之をさへ得ざる人あり、しかも此人や低聲の談話も、遠方の鳥聲も能く聞くなり、是れ實に心理上面白き現象なり。抑も吾人の聞き得る音には上下共に限界ありて、低きに過ぐるも、高きに過ぐるも之を知覺する能はざるなり。而して其の限界の度は人々之を異にす、此人の如きは高調子聞き得る度普通よりも甚だ低きにゐるなり。故に虫聲の如き、笛聲の如き高調子のものは

之をさく能はずして却つて低聲は之をさへ得るなり、世此類の人多からん、幸に諸君の觀察を待つ。

旅

行。休暇は「ヤスミ」なり、然りと雖も唯平生の業務を休みて心身を保養し、他日大に爲すゝの英氣を蓄積するを意味するのみ、徒らに睡眠と飲食とを以て之を送るの言ひにわらざるなり。

されば日夜業務に忙殺せられて吾人の心神に慰安を與ふる能はざるの士、豈に此の好機を逸すべけんや。一家族を携へて旅行するも可、一二員のみにて旅行するも可。純潔なる自然に對して造化の大秘を尋ね、太極の玄妙を悟り、未見の事項形勢を探知し、精神的に無限の快味を發見し、幾多の新智識を領得し、生理的に活潑なる運動として体力を鍛鍊し、苦難と戰ひて堅忍不拔の精神を養成す。且つ其の之を回顧する時、亦た頗る愉快を

覺ゆ、しかも其の愉快の程度は、旅行當時の困難と比例するなり。

附言す。余が言ふ旅行は今日流行せる所謂紳士輩の避暑旅行にあらざるなり、彼等のどこまでも柔弱にして猥穢、駄小説を晝寝の仰に終日を送る是れ吾人の意味するものにあらざるなり。

海 水浴 四面水を環らす我國現時の夏は實に海岸にあり。松青く沙白き邊、清澄の氣に逍遙

し、波穩やかなる海水に浮沈する、人世の快事何物か之に如かん。海水浴の利益は吾人之を次の四者に見る、曰く生命の保護、曰く膽力の養成、曰く軍事上の利益、曰く通商上の利益、しかも現時世界各國の輸贏を決すべき大舞臺は、我が東洋に在るに於てをや。海事思想の發展は忽諾に附すべからざるなり。一家の團樂を此の秀靈の地に移し、

此の思想を養ふと共に、海岸の發達が如何に人世に影響するか、海水と氣候との關係、其の地方を構成せる岩石の種類、其の土の動植物等につきて研究し、之を子女に知らしむ、其の効實に偉大なり。更に進んで渺茫涯なきの大洋、行帆點々、走烟片々。地脈中斷し、斷岬相對するの所、危礁巖り、怪巖峙つ、凸兀糾紛、既に瑰偉峻峭を曲盡するあり。潮流奔馬の如く、其間に躍動し來り、亂濤相闘ふの間、水蒸氣飛噴し、水面常に雲霧を吐き、幽暗の景を添ふるに至つては、雄大、崇高、卓厲、豪宕の氣自ら養はるゝなり快なる哉夏の海岸。

茲に夏の家庭を草す。

水と人生

川口孫治郎

水の雨潦、溪流、野水などとして、底淺き低地に相會するや、雜草と相伍して、薄平たく慈ひて此處に澤となり、

太地の隆起の不同ありし其凹に、或は地震、伏流等の爲に地層の陥落せる彼窪に、或は息火山の舊噴火口に、或は流域の變遷の爲に殘されたる舊河道に、上より流れ込みて、若くは底より湧き出で、或は圓く、或は長く、或は方に、或は歪み或は淺く、或は深く滙溜して、其處に湖となり、泥深き低地に淺く滯留して沼をなし、人工によりて堤の内に堰き止られて灌漑の爲に池をなし、粧點の爲に庭園に溜められて泉水となり、飲料の爲に掘抜かれたるに湧き出で、井戸となり、掘割

に壅塞せられて濠池となり、疏通せしめられて運河となる。

小川あり、溝あり、流れて湖沼池澤濠渠に入り満ちては、更に滾々として溢れ出て、川をなし、岐れて復た小川となり溝となり、合して又遂に大河長江となる。

源泉滾々不_レ舍_二晝夜_一、盈_レ科而後進、放乎四海、げにや、水の行動は、投機者流の一足飛びの亂行に非ず、生意氣青年の病的奮進の備に非ずして、自然の情理に基し、必至の經濟に因れる、健全なる、秩序ある動作なり、亂世に於ける覇者の野心に非ずして、萬世不磨の王者の心事なり、暗黒時代の山師に非ずして、文明社會の大成功者の秘訣を示せるものなり。

楊柳あり、蘆葦あり、蘭あり、蓮あり、菖姑、

澤瀉、菱、河骨などあり、渺茫たる稻田萬頃あり水の爲に榮えつゝあるなり。

鷺あり、水鶏あり、翡翠あり、鴨、鴨、鵠、鴛鴦、雁あり。川鼠、鮎、鰻の棲めるあり、油斷すべからざる鰐、河馬などの潜めるあり、愛すべき鯉、鮎、鮎、鱒、鰻、鮠より、鱈、丁班魚の輩に至り、蟹、龜、蛙、螟蛉、などを先登として、蜆、蚌、赤螺、田螺、線香虫を中堅とし、子子、紅蟲などの一族郎等を後陣として、此等の間に起る凡ての活劇は、亦水の邊、水の中にて演ぜられつゝあるなり。

太古の民、溪に向いて、始めて交通の不便を感ず、偶、僵木あり斜に流に架す、乃ち相携えて渡る、細溪川の丸木橋即ち之れなり。漸く居を定むに及びて、所在の石を利用して石橋こゝに起り、

更に進めば、木を横たへ枝を敷き土を載せ芝を植ゑて土橋乃ち始まり。更に進みて、鋼鐵の刃の使用に熟すれば巧に工夫したる木橋、石橋となり。時に煉瓦橋となり。遂に鉄橋となる。此橋々や、これ、吾人類が、交通運輸の爲に、水に凌駕し架したるものなり。

素戔鳴尊、浮竇ヲ作り韓國ニ往來シ云々、浮竇とは船なり、彦火火出見尊ハ無目籠ヲ用ヒテ海國ニ往キ云々、編み舟の時代なり。近時尙蝦夷人の用ひし丸木舟時代亦之と相前後し。漸くにして釘を用ひて組立つるに至る、平田舟の如き今の漁船の如き即ちこれなり、次で、金屬張の船舶、鋼鐵の艦艇を工夫し、遂にアルミニウムの雷艇を出さんとす、これ、人類が、水を巧に利用して交通運輸の便に供し、以て其發展を逞うせる一なり。

滄浪之水、清兮可三以濯我纓、濁兮可三以濯我足、清濁又各取るべき所ありて、共に清淨の用に當るに足る。之を灌溉の用に供して、田園萬頃、花木穀草、穰々繁茂し、萬民歡呼の響こゝに起る。

古封建時代の諸侯が、濠を穿ち之に水して、以て敵を防ぎたるは、水を逆に利用したる一例にして、今は疏水工事を起して、水の源淵を涵らして地を農業上に利用し、同時に、其謝出する水を工業上に宏大に應用するに至る。

精出せば、凍る間もなし、水車、

之れ、初歩の勞力利用なり、次の利用は、齒輪、帶革に移すにあり、更に進みたるは、發電の原動力として作用せしむるに在るなり。

古人曰く、盛徳之士、體無不具、故用無不周、と果して然らば、水も亦盛徳の士なる哉。

此盛徳の士、王者の懷を有する水も、一朝悍然として靜に慍れば、一滴よく幾百數の病根を包含して巨萬の人命を奪ひ去り、赫として茲に一たび怒れば地上の萬物舉げて一面の泥の海となる、咎むる勿れ、怪むなかれ、文王一たび怒れば天下平なるに非ずや。

(未完)

支那人に對する幼兒の考

ひさ子

▲事柄は少し古いやうですが、それが今に至るまで、又之からも永く影響する事なので、少し書き出して見ませう。

▲日清戦争の時の我軍の大勝利は、實に愉快なうれしい事で、其當時には女の私でさへも、肉がをとり血もわきまとして、號外を見る毎に心で我軍の

萬歳をとなへました。あ、併し相手である支那人の方ではどんなでございましてせう。

▲日本人が喜ぶべき側ばかりから見れば、實に壯快な活潑な此日清戦争は、已に其時に一廉の大人となつて居つた人には勿論、まだ十分譯の分らない幼児にまでも、随分いろ／＼の精神的影響を與へ、之を教育しました。ほんとうに戦争が國家、社會、人、幼児に影響し、之を教育することのなか／＼甚しいといふ事は、いまでも申すまでもでございませぬ。

▲處が其當時まだ生れて居らなかつた幼児、即ち明治二十八年以後に生れた幼児でさへも、此戦争の影響をうけて居ることは随分つよいものでございませぬ。

▲又戦争の當時に立ちかへりますが、一体あの戦

争の時、現に我軍が彼地で連戦連勝して居る時に我國では其祝に随分さわぎました。戦つて勝つ、勝つて喜ぶ、喜で祝ふといふのは人情の然らしむる處で、別に悪くはございませぬが、其さわぐ時に、自國の勝を祝ふ序に、彼國の負けたのを嘲けるやうな者や、いかにも向を侮りさつたやうな模様もあつたやうにさゝました。

▲又あの時にはやりました軍歌、は一方ならず、大人と言はず幼児と言はず、凡て人の心をあふぎ立て引き立てましたが、眞に勇壯な活潑な自然に忠君、愛國、尙武の氣象の養はれる有益な歌の方が多くございましてけれども、中には随分大人氣ないひとのものもございましてた。

▲口には中華と誇れども心の野蠻は反比例であるとか、經遠知遠と只われ猛く名のりて誇れど其甲

變なくて己の國だに守りもあらずへとか、いかにも向を愚であると言はぬばかりの歌も二三見えました。

▲勝て兜の緒を締めてこそ、奥床しくもあり、又後來の爲にもなりません、已に勝ちほころといふはこる處まで進むと、もう其結果の内にはうれふべき分子が含まれませう。日清戦争の時に大人が勝に乗じて其勝利にはこつた影響が、いろ／＼ある中に極小さい幼児にまで及で居る事も随分ございます。

▲まづチャン／＼坊主といふ詞、之は只こゝに書くのでさへも大人氣ない詞ですが、此詞がどんなに廣くひろまつて居りませうか。私は日清戦争よりもズット前に、一時大にはやつた「日清談判破壊して」といふ俗歌の中に「遺恨重なるチャンチ

ヤン坊主」といふ詞をはじめて聞き、いやに感じた事がございしますが、其頃にはそんなにだれもがいふといふ風に擴まつては居らなかつたやうに思ひます。

▲それが日清戦争以來急に此詞は擴まつたやうに思ひますが、どうでございませう。心ある父母、考ある家庭に育てられた兒はそうでもございせんが、教育思想のない下等社會の父母に育てられて居る幼児は、今でも此詞を口にして居ります。そうして只無邪氣に言ふのもあり、又一種支那人を輕侮するやうな考をもちながら言ふのもございします。

▲私は一保姆で、毎日幼稚園で、下等社會の幼児と共に暮して居るものでございしますが、毎年新しく入れます幼児の口から、此チャン／＼坊主とい

ふ詞をさかぬことはございませぬ。そうして「そ

ういふものではない支那人と言ふものである」と教へて、此詞の跡を絶つには随分永くかゝります

▲又日本勝つた支那負けた、といふ詞も随分申します。之は實際をうであつたのですから、其詞は

別に悪くはございませぬ。けれども、こういふ些細な事から、日本人は怠けて居つてもどうしても、

別に一生懸命に勉めなくても、之から先でも、當然支那人には勝てるものである、支那人といふものは日本人と戦へばきつと負けるものである、と

いふやうな油断の心や誤つた断定が、もしも幼児の心に萌しましたならば、それこそうれふべき事

であると思ひます。

▲調だけならばまだしもでございませぬが、どうも根本的に、支那人は弱いえらくないもの、と思ふ

て居る兒があるやうに見えます。其一例を挙げま

すと、時々支那人の參觀者がございます時にあつて「今の支那人はえらい支那人である支那人の中

にえらい人は澤山ある」と話しますと「それでも先生支那人が弱くて日本の兵隊に負けて居る繪が

ありました」とか「誰さんは支那人は弱いと言ひました」とか「あの支那人は日本の兵隊さんと戦

をしたらどうですか」とかいろ／＼の反問を出します。之等は幼兒が見聞上、又は比較といふ考

から、自然に出るのもございませぬけれども、中には支那人は弱いものと思つて居るから出る詞や問

も随分ございませぬ。

▲こういう風な考を抱いて居るのは、どういふものでございませぬ。大きく言へば國と國との關係上、どうでございませぬ。之が譯の分つた大人なら

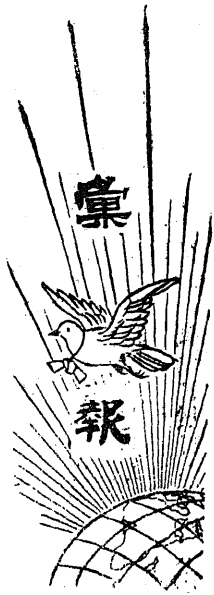
ば、嘗ては我國が勝つたしかし何時までも支那を侮るのには良くない、と思ひませうが、幼児はそんな事は考へないで、只戰場に於ける支那人のみが深く腦裡に染みて居る爲に、絶對的に支那を弱しとして居るのであるのではございませうか。之は全く戰爭當時の勝ちほこつた大人の考、話、書草紙などが、今に残つて居る爲に、其後生れた幼児までがこういう風を考へて居る事と思ひますわ、實に幼児に對して大人は、一の話一の書を見せるのもよく、考へた上でなければなりません

▲明治二十七八年に日本が支那に勝つたのは、事實なのですから、之を話したり、書を見せたりして忠君、愛國、同情の心を養ふのは結構な事でございませうけれども、もし其時に、支那人を何時までも侮るやうな考、又あの戰場に於ける支那人の

みをまだ何にも知らぬ柔かい幼児の頭に注ぎこみましたならば、もう其話も其書も有害なものとなります、ですから此戰爭なり、其話なり、書なりを良く用ひて活かせる事が必要でござりませう。

▲支那人に對してうれふべき考を有て居る幼児は多くは譯の分らぬ下等社會の家庭に育てられて居る幼児に多いのでございませうから、以上述べましたのは日本今日一般の事として申したのではございませぬ。社會の一隅には、今でもこんな事が残つて居るといふ事を、深く感じますわまり記しました。





●九重の御消息

●御命名式 第二皇孫殿下御命名式は、皇室誕生令第八條に依り、先月一日午前十時目出度終らせらる。

御名 雍仁
御稱號 淳宮

宮相よりは御命名の告示を即日官報號外にて發せられたり。

●勳章御贈進 天皇陛下は先月三日午前十三時十分御出門、芝離宮へ行幸あらせられ、樓上一の

間にて於て露國大公殿下に御對顔、親しく大勳位菊花大綬章を御贈進の上、種々の御物語ありて、一時三十分還幸あらせられたる由。

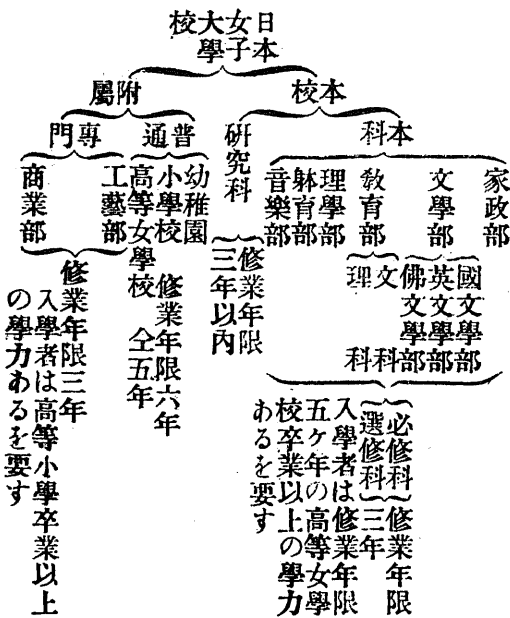
●學びの窓

●女子高等師範學校 去る四日午後六時より、同校講堂に於て市村讚次郎氏の北京につきての講演會を開きし由▲十一日より本校附屬校園とも暑中休暇となりしが本校生徒の歸省せざる人たち凡そ四十人許りは寄宿舎に残りて静養しつつありと▲東京府高等女學校補修科卒業武井綱枝子は今回全校保育囑托を拜命せりと。

●東京府第一高等女學校 全校は去月十九日第六回紀念祝賀式を舉行せり(東京だより参照)全校は去る明治廿一年十二月京橋築地に校舎を借りて創始せし以來本年に至るまで殆んど十五年、而

して第一回紀念會は實に卅年七月十九日なりきと
いふ。

●女子大學 愈降盛の域に向へる同校は今回、
同校一覽を刊行したり。之によりて見るに、同校
今後の計畫は實に左の如くなりといふ。



●四谷英語學校 四谷區船町二番地なる同校は

今回女子部を新設したる由にて、尚篤志なる苦學
女生のために無報酬にて教授の便を與へらるべし
といふ。程度は高等女學校及同校入學受験の二級

なりといふ。

●東京女學校 神田西小川町なる同校は、校主

竹澤里氏の熱心なる盡力を以て、漸く其規模を大
にすべしといふ。

●東京音樂學校 同校は先月五日卒業式を舉行

したり、文部大臣以下多くの貴顯紳士臨場せられ
午後三時より卒業式を開始し、校長の訓示文部大
臣の祝辭等あり、終りて職員及生徒の演奏會あり

たり。今回の卒業生は二名なりし由

●女子美術學校 本郷區弓町なる女子美術學校

にては先々月廿八廿九の兩日校友會製作品展覽

會を開きたり。兩日とも雨天なりしに拘らず、來觀者非常に多く生徒の製作品には頗る見るべきもの多かりし由。

●ヒュース女史　は愈來月を以て歸國の途に附

かるべしといふ、去る五日の全女史送別會は、非常の盛會にて、女史は熱心に我邦現下の英語教授法の當を失せるを指摘し、英語教授法研究會の速に開設せられんことを勸告せられたり。一年

間同女史の滞在の實に我國教育上少からぬ影響を與へられたるは吾人の深く女史に謝する所なり。

●吳如綸氏　先月來頻りに府下の各學校を參觀

して我國の教育の盛況に感歎せられつゝある同碩儒は殊に本邦女子教育の旺盛なるに一驚を吃せられしといふ。途上多くの學生の相來往せるを見て日本は學生許で充ちて居る様なりといはれしとが

兎に角同氏今回の來遊は、彼國、文運扶植の上に偉大なる影響を及ぼすべきは疑ふべからず。

東京だより (七月廿二日)

霽 水 生

▲いや降り續き候、降り續き候。六月十日より始めて先月上旬、はや梅雨は相濟み候に、引き續いて二十日過ぐるまで、毎日く降りみ降らずみ、かさくらすしてのみ打過ごし候には頓と閉口致し候北陸の邊は之が爲め、少からぬ出水の災害之あり候由、別段の御被害もなくて相濟み候や、伺ひ奉り候。

▲併しながら、雨の東京は去つて茲に炎熱の都會は相顯れ申すべく候。雨中の泥土は忽ちにして熱帶の砂漠と變じ、蒸すが如き熱風は、颯然として

炎くが如き紅塵を飛ばすこと正に萬丈、全市時に
晦暝の巷と相なり可申、こゝに至つては、清秀の
山、清冽の水、田舎の樂土轉、美望に堪えず候。

▲本月十日も目前に迫りて、社會の或一部の人々
は先月、先々月來何れも血眼になりて狂奔致し居
り候由、どゝか眞に國を思ひ、眞に國家の事業に
盡力致すべき人々の揃つて當撰せられん事を望
み候。

▲前々便にて候ひしか、近來の出版界のことを申
し上げ候ひしが、クドイ様には候へ共又々御報導
可致候。

▲印刷の便利なるにつけ、出版物殊に少年少女雜
誌の發刊の盛なること驚くべく候。一方に於ては
喜ぶべき現象には候へども、熱々視察致し候時は
頗る歎はしき影響を與へ申候。即多數の雜誌界の

間に立ちて已を維持せんがため、種々なる營業方
法を講ずることに御座候。由來婦人殊に少女は些
少の毀譽褒貶にも著るしく、心氣を動かすものに
候。併も之を利用して、左までもなう女學生を御
大層に矢鱈に紙上に吹聴し、其寫眞を挿み、其文
を載せ、百方之を持ち上げ煽動し、其虛榮心、其
浮誇心を熾盛ならしめ、以て其販路を擴めんとなす
るが如きは、子女教育に取つて著大なる惡結果を
與ふることは、敢て贅辨を要するまでもなきこと
に候。或小説雜誌は醜業婦の寫眞を挿入し彼等の
機嫌を取つて以て、其販路を廣め居り候事は御承
知の如く候、併も苟くも教育的といふ雜誌に於て
敢て此法を取るが如きは劣の最も劣なるものと存
じ候。

▲妙齡なる女學生に非らず候ても、例令ば當世毀

舉尙未だ定まらず、眞價尙未だ認められざる人を無暗に譽めちぎるが如き、亦同じく大害を流すもの候。勿論或人に對する褒貶は、各人の所見によりて異なれば甲の貶する處、乙之を褒す、無論是非なし、所謂棺を覆うて後定るもの候へども苟くも少年薰陶の任を目的とせる出版物に在りては、よく〜熟慮、慎考明瞭なる判定を以て物したく候。

▲何れ近來は雑誌の世の中に候。中には思ひ切つて大きく種々多方面に亘り併も非常な廉價を以て販賣致すものも有之候。併も多種多様なる丈けに随分玉石同架、味噌と何やらとのゴツチャになつた恐も有之候。たゞ面白がらせの爲めに、益にもなき寧ろ有害な材料で紙面を塞ぐよりは、單純でも有益で興味ある材料を精撰致したく候。

▲去月十九日府第一高等女學校記念會は、もはや彼の校舍に於ける最終の會として眞に立錫の地なきまでの盛會にて寧ろ會場に溢れ申候。生徒の朗讀英語の會話など中々よく出來候。終りの卒業生職員員の演奏は當日の花にて候ひき。此の如き會に卒業生が出て、興を添へるなどは、訓育上最もよき事と存じ候。

▲世には可笑しき事を問答する人も有之候。即ち女子に教育を施すことのよいか、悪いかの題につき問答することに候。教育といふ意義より考へ候ても、女子に教育して不可といふ理由は何處に有之候哉。但し悪い教育、似而非教育は無論此限にわらず候。或は又、單に女子に學問させる、又は生學者にさせる教育も亦此限にわらず候。兎角女子と（イヤ）是は失禮、小人とは養ひ難いといふ

所より、女子を教育する學校が、誤つて女子を生學者に致し候事も有之候はい、可笑しき、不合理の様な非難も當然起り申すべく候。

▲嘉納東京高等師範學校長は、愈先月廿一日清國に押し渡り候由。活動の舞臺は何處にても廣がり居り候。下田歌子女史も渡航すべしとの評判も聞き候。

▲夏休みにて、當地目下頓に寂寥を感じ候。何かと小言の様な事許り并べ立て、相すみ申さず、御海容願候。悪疫流行の時節柄、折角御自珍祈り候。早々。

地方通信

長野縣の女子

長野 飯島八千溪

△女子の就學 市街地の小學校は、一般男子の就學に劣らない、のみならず、此の二三年わ、女

生徒教が男生徒數に超過して居る。村落部に於ても、近年大に、女子教育の必要を感じて、其の就學分合が、著しく進んで、百中、九五以上の成績を現はして來たのが甚た少くない、殊に、慶すべきは、只に尋常科に満足せず高等科を併置して、

然もその女子就學者が男生徒數と比肩せんとするまである。

△高等女學校 は、長野、松本、上田、飯田の四校あるが、四校共、一年一校舎の狹隘を告げ、志望者に満足を與へ兼ねる傾も、或は、ないとも云へぬ、此の他各所に、此の種の學校を起さんと劃策して居る向もある。

△女生徒の運動 縣下一般女生徒は、屋外運動

△女生徒の運動

縣下一般女生徒は、屋外運動

が盛である、是には、種々の原因がある、歴史上、我が日本國民は、昔より今日に至る迄、其の體格倭小になり、現在猶ほ成りつゝある、之では、如何にも日本の將來が不安心だ、芋も女種の太つたのを選んで、何でも彼でも、母の體格を強壯にせねばならんと云ふ説が、天下に瀰漫して來た、之は誠に結構な説であつたから、直に我が長野縣中に擴がつて、ヤー彼方の學校でもブランコ、此方でもブランコ、ヤン遊動圓本だの、ヤレ、ロンテナスだ、何々競争だのと、休憩時間と云へば、學校の庭では、ワイワイと鯨波の聲だ、現に、長野高等女學校には、ロンテナスのコートが十八ヶ所設けてある、他は、推して知るべきである、之に次ぎて起るは、

△女生徒の服裝

だ、之は渡邊長野小學校長、

數年よりして、大に袴の必要を唱せられ、日本女子の體格勝れざるは、腰部を纏綿する事、十四五匝なると、裾の開く爲めに、十分なる下部の運動が出來ざるとが、非常なる影響を與へて居ると云ふを、時の新聞に雜誌に、公私の席上に、熱心吹聴せらるゝと同時に自己の所理せる小學へは實施した、サー袴を用いると、今までのよゝに、前を押へて飛ばずもよゝいからドーモ活潑に成て來た、斯る工合であつたから、バツト縣下に廣がつて、今では、如何なる山間僻邑でも小學校の女生徒と云へば皆、袴を着て居る様に成た、

△女生徒の筒袖 袴を用いて、運動は餘程敏捷

になつたが、何致せ、二尺八寸もある、振袖をビラ／＼舞はしてやるのでは、寸も十分なる遊戯も運動も出來はしない、ソコで生徒自身が筒袖の便

利なるを唱へ出したのを、好機逸すべからずと、

大に之を賛し獎勵したので、本年の五月廿一日

畏くも 東宮殿下當縣下へ行啓の砌には、縣下全

体筒袖に成たると思ふ、

△生生徒の帽子 之も屋外運動の盛なる結果、

自然の要求として、戴帽の許を、生徒或は父兄が

願ひ出した、長野市内各種學校寄々其の戴帽必要

説の盛ならんとする矢前であつたから、夫れく

交渉して、市内學校戴帽に決定し、今日では、尋

常小學より高等女學生に至るまで、皆、戴帽、筒

袖、袴と云ふ扮装だが、一向に、見悪くない。縣

下、他地方にても、今日頃わ、戴帽しつゝあるを

思ふ。

△裁縫講習會 信濃教育會の事業として、縣下

各地に開き、既に尋常部の事業は一般に終り、今

は、高等部の講習第二回を済し、次第に第三第四

と各所に開設の筈である、斯して、成績を考查し

て、相當の資格を與へるに成て居るので、大に

良裁縫教師を得るに好都合である。(普通學科及び教

理訓練等)其の他、郡立、私立のもの多々ある。

△婦人會 之は、少し流行の傾きも有るか知ら

んが、町以上の所は勿論、村落、殊に、山間にて、

百戸内外の部落にまでも往々設けられてある、豈

に、盛と云はざるを得ないでないか、其の事業と

しては、折り／＼知名の人を聘して其の説を聞き

或は、會員相互に、研嗟して、各自の進歩を計り

一方には慈善事業を引提げて活動して居るが、女

子には、最も、善い事業と思ふ。

北海道通信

通信子

● 歸省 夜を負ふて遠く他郷の月に嘯くもの、
今や歸省の期も近きにあれば、雙親故舊の友の門
に倚りて待つや久し。

● 講習 北海十一洲其廣袤亦狹きにわらず、近
くに於て開設せらるへき講習の草々は、札幌に、
小樽に、函館に、古平に、江差に、根室に、釧路
なりし。

● 女學生の服裝 札幌高等女學校にては服裝の
華美に流るゝの弊を防かんがため、教師率先して
一斑に筒袖を用ゆることに内規せりと云ふ。

● 七月の北海天地 梅雨漸くはれて綠陰の下に
蟬聲喧しく、室内温度八十度にして、實に三伏
の炎暑は東都に譲らざるべし。

海外彙報

◎朝鮮及清國通信

故 瀨川 友子

(前略)朝鮮は御承知の通り全く各港とも日本化し
て少しも外國の様なる心地仕らず、殊に山水とも
に清らかにして釜山仁川の如きは水道もあり、電
話もあり電燈もあり、涼車もあり、たい人力車な
さのみが御地など、異なる心地致し候。學校も
かゝる人口にて、内地にて容易に見得べくもわら
ぬ建物出來致し居るなど、少しも他の境土とは思
はれ申さず候へども、一草水を隔て、芝罘にせよ、
全く風土變り、塘后に上りし時の如きは、何もか
も泥くさく、踐む土さへ誠に不潔にして、不潔な
る支那人の相往來する様、實に淺間しくとも何と

も申しかたなく存じ候。たゞ本船より小蒸氣に乗
り代へ十四五湮をすゝみ塘垢砲臺を咏めに参り候
時は、實に愉快に感じ申候。砲臺には先づ日本軍
の占領を占し、國旗めたかにひるがへる、之には
参り合はせし日本人一同快哉を呼び申し候續いて
各國の旗をそれく風になびき、さしも堅固の砲臺
はいかに多くの人力と金力とを費やして成立せし
ものならんに、情なくも當時支那人をして壞さし
め居り申候。塘垢に上陸して茲に一泊し、翌朝七
時の汽車にて出發、際涯なき原野を眺め、或は六
種の電柱(各國の所有線)にそゝる其國の状を見て
過ぎし日清の役、或は一昨年(の事)など思ひ返して
ある間に天津に到着致し候。此汽車は一旦日本軍
の守りし處なりしも、今は英國の下に在りて札改
め等は英國の軍人の致す處にて候。上等と申して

も、日本の、下等の如く下等は支那人のみにて候
へども、日本の石炭などつめる列車の如くにて、
到つて粗末にて候。天津は專管居留地の方のみ見
物致し候へども、實に見事にして、建築の宏壯な
る、設備の整へる、且つ交通には人力あり馬車あ
り、實に結構に候。只だ私の不快に感じたるは、
樹木あれども葉は皆泥色を呈し、灰の如き泥土は
一面に舞ひ上りて、天も亦泥色をなし、水も亦泥
土にて混濁せるなど、實に日本の如き國に住みな
れしもの、始は不快に感ぜずには、相すまぬ處
にて候、氣候も朝より蒸し暑く、まだ六月の始な
るに、早くも九十度の上に出で候、内地にて御住
はせらるゝ方々は、實に御仕合はせと存じ候。當
地(牛莊)も水には相變らず不自由にて、昨今の如
く雨ふらぬ間は、飲料水も盡きはせずと心配致

し候、始は何もく泥臭く御飯も色附き候上に、多少鹽氣有之候故、いかにしても食欲御座なく、誠に困り候ひしが、昨今は大分なれて食欲も出で申候、しかも氣候は天津などは異なり、いかに暑さ内もまだ九十度以上に昇るやうの事は御座なく候殊に暑さは二週間許の間に、餘は誠に凌ぎ易さ由に候、冬は反對にて候由、當地は御案内の如く一旦日本の占處なりしに今は露西亞民政廳の命に從ひ居り候(中略)日英米間は誠に親密にて候(中略)當地の或方は、將來日本人獨占の商業地たるに至らんと申され候が他港よりは餘程活潑の様に候。(下略)

六月廿三日 牛莊より。

尙別記釜山幼稚園記事御覽に入れ候

▲韓國釜山大谷派本願寺別院内私立幼稚園記事

本園は明治三十年京都揚梅幼稚園大坂府高等師範學校附屬幼稚園の規則を參考として設備し、保母二人を以て保育に當らしめ園児僅かに二十名に過ぎず、當港は一道三府四十縣七十七ヶ國の居留民にして圓滿なる樂さ家庭に長養せらるゝもの殆んど稀也。保母を得る事亦容易ならず、自來數名の保母交代ありたれども種々苦心の結果、日に月に保育の必要をも感じ、現今の園児八十名に達し、園主井上香憲、保母桐幡貞子、成田芳子、助手津之江延其路に當り、日々出園兒七十名計にして、保育時限表等は別紙の通りに御座候右御參考迄申上候也。

新刊紹介

▲女性征伐 全一冊 女 鶴 子著

健全なる女子教育上の意見、併も其題目其表紙、其体裁、如何に

も今様のハイカラ的文学を氣取りたるは、何の意味なるかを知らず、惜しむべき心地す(定價金二十錢。本郷森川町一、育成會發行)

▲斷腸花

全一冊

堀内

新泉著

著者は教育小説を以て自ら任ずるの評あり。輕薄なるハイカラ文學旺盛の世に、本書の如き小説を見る。吾人の著者に多とする所なり。納むる所短篇十、每篇涙を以て讀み終る。健全なる教育小説といふべし(定價二十五錢。芝金杉川口町五、文潮社發行)

會報

入會

- 香川縣師範學校女子部
- 神奈川縣横須賀町横須賀小學校
- 京都市烏丸戎川
- 牛込區東五軒町三五
- 東京麻布區我善坊町四九
- 東京麹町區有樂町三ノ一
- 鳥取縣鳥取市高等女學校
- 牛込區山伏町二〇
- 京都市東三本樹南町八番戶
- 石見國美濃郡東仙道村大字三谷
- 東京京橋區南佐柄木町二
- 東京小石川區眞差町二六

- 新居い
- 野秋き
- 櫻並壽賀
- 新井博次
- 塚本るい
- 八田さし
- 小田しの
- 川島庄一
- 高安吾妻
- 佐々木さだ
- 北村きた
- 吉澤幸

一金五	自三十五年	至全	十月
一金六	自三十五年	至全	四月
一金七	自三十五年	至全	九月
一金五	自三十五年	至全	七月
一金五	自三十五年	至全	六月
一金七	自三十五年	至全	六月
一金七	自三十五年	至全	六月
一金三	自三十五年	至全	八月
一金五	自三十五年	至全	六月
一金四	自三十五年	至全	九月

會費領收

自明治三十五年六月二十六日
至全 七月二十三日

- 下田 鶴
- 高山ふみ
- 尾崎万龜
- 岡澤やへ
- 外山 茂
- 土井たま
- 服部作枝
- 村川 愛
- 柴田かづ

東京本郷區元町一ノ四
東京下谷區中根岸八一

轉居

東京淺草區西三筋町九番地へ
神田區小川町四十一番地 竹内忠治方
牛込區原町三丁目六十七番地へ
大坂市東區博勞町二ノ一へ
栃木縣宇都宮高等女學校へ

- 武井綱枝
- 黒澤省吾
- 大山千代
- 喜地すが
- 大橋みなか
- 町田 孝
- 岩崎かの

婦人の子と第 二 卷 第 八 號

一金一圓五十錢	一金一圓	一金八錢	一金五錢	一金一圓	一金六錢	一金六錢	一金二圓	一金五錢	一金二圓	一金一圓五十錢	一金五錢	一金一圓二十錢	一金二圓	一金一圓	一金六錢	一金四錢	一金四錢	一金四錢	一金四錢
自三十四年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
四月	六月	七月	九月	五月	六月	六月	四月	八月	十二月	二月	三月	六月	十二月	十一月	七月	五月	八月	八月	八月

辻きく	尾田けい	岩下なほ	富岡むめ	佐原貞	宮武みよ	平野ま	坪内きく	小關清	笠井し	下村三四吉	川島みつ	岡都子	永田か	新居い	阪元あ	平塚さ	小島ほ	重田ふ
自三十五年	自三十四年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十四年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
一月	六月	十月	十一月	十二月	六月	四月	十月	七月	十二月	八月	七月	七月	七月	七月	七月	七月	七月	七月

松岡さち	大橋みなか	森田きく	堺さき	森乙女	長谷川はる	金子きた	町田孝	吉村はま	榎並壽賀	伊藤貞勝	山田せん	富田八千代	平野みよ	赤江よ	小林ふ	宮崎も	高木な	木村さ
------	-------	------	-----	-----	-------	------	-----	------	------	------	------	-------	------	-----	-----	-----	-----	-----

大日本割烹學會
募會員

◎料理講義錄 前期第三號發刊

◎會則及講義錄掲載學科表入用の者は郵券封

入申込むべし

東京市京橋區鈴木町十一番地

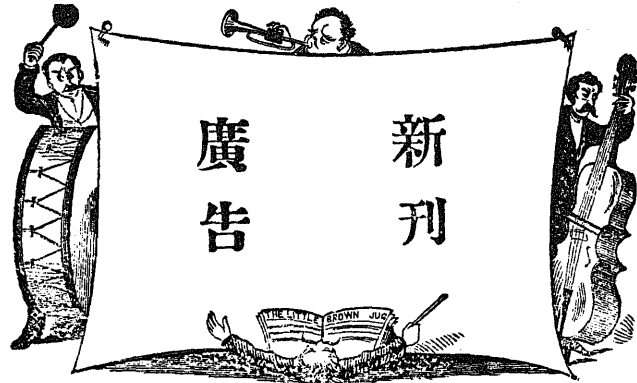
大日本割烹學會

八月

唱歌教科書

郵税一冊に就き金四錢

近來唱歌の流行普及に伴ひ、之が用書の發行さるゝもの夥しき雖も、多



新刊 廣告

及教授上一の間然する所なき未曾有の最良教科書と云ふも決して誣言にあ
 らざるべし

教師用 第一卷定價金三十錢
 第二卷定價金三十錢
 第三卷定價金三十錢
 第四卷定價金三十錢
 生徒用 第一卷定價金十五錢
 第二卷定價金十五錢
 第三卷定價金十五錢
 第四卷定價金十五錢

此書は女子高等師範學校其他の學校に於て實施せ
 らるゝ舞蹈の方法及樂譜を記載せし者也

明治三十四年二月廿八日第三種郵便物許可

吉田信太編

舞

本書は女子高等師範學校其他の學校に於て實施せ
 らるゝ舞蹈の方法及樂譜を記載せし者也

洋琴

鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種
 舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

樂隊用樂器

大太鼓 金貳拾圓以上小太鼓 八圓半以上シンバル
 金四圓以上其他バス、バットン、テナリ、アルト、
 コルネット、トロンボン等 金貳拾圓以上百六拾
 圓迄

鼓隊用樂器

太鼓 金拾圓以上 橫笛 金壹圓以上
 ○學校用一組拾三圓

手風琴

保險 參十圓迄 各種
 附 參十圓迄 各種
 右の外兩用風琴、吹風琴、ハルモニカ、フラジョレ
 ツト其他各樂器並に和洋音樂書各音樂附屬品各種

洋琴

御郵券送附目録進修呈繕